

20th
Anniversary



炊き出し



市民活動交流会

公益財団法人
コープともしびボランティア振興財団



震災写真展



研修事業

20周年記念誌



倒壊した本部ビル&シンボルマーク



地域づくり活動の視察





公益財団法人 コープともしびボランティア振興財団
理事長 山口 一史

「開拓者」であろうと自らを戒める

コープともしびボランティア振興財団が誕生したころは、阪神・淡路大震災の多くの被災者が仮設住宅で不便で不安な暮らしを続けているときでした。被災地の内外から大勢のボランティアが支援に駆けつけていました。この頃はボランティア活動のニーズとシーズを調整する仕組みがなかったため、ボランティアの意欲が空回りすることもありました。

そんな中で、ボランティアたちは自分たちでニーズを探して回りました。避難所で元気をなくしている子どもたちとサッカーに興じて元気を呼び込んだボランティアグループがありました。復興住宅の入居者募集が始まると、だれもが分かりやすい住宅立地場所周辺の手描き地図をつくって、土地勘のない人たちに暮らしの利便性のあるなしを伝える活動が生まれました。実際の引っ越しの時には、沢山のボランティアグループがネットワークを組んで、荷造り、荷解きを相互乗り入れで被災者の待ち時間を最小限にする動きもありました。それまでだれも考え付かなかった役割を果たすグループが現れたのでした。

隠れているニーズを探り当てて、役割を開拓する姿勢は社会にボランティア活動の自主自立を強く印象付けました。まさにこうしたボランティア環境の中で、私たちの財団は歩みだしました。

財団は阪神・淡路大震災からの学びをしっかりと受け継ぎました。ボランティア活動はニーズを見つめることも大切ですが、ニーズを引き出すような「ボランティアエネルギー」を導く重要性も実践していきたいと考えてきました。

地道な活動を長い期間こつこつと続けているグループも、新しく何かお役に立ちたいと若いお母さんたちがスクラムを組みだした活動も、どれもこの社会にとって大事な活動です。そんなさまざまなグループを財団は応援してきました。

その活動を本当に大切に思ってきた大勢の人たちの熱い支援がありました。賛助会員のみなさん、寄付を続けてくださっているみなさん、多くの支援者の方々の手と手と手が財団を支え、前に進むよういざなってくさっているのです。

財団の前からも、横からも、後ろからも、この20年間、温かく見守ってくださった多くの方々のご期待に応えるためには、財団は常に「開拓者」でありたいと改めて強く感じます。

20年前の震災ボランティアのみなさんが隠れた課題やニーズを掘り起こしていったように、財団は次の10年、20年をさらに開拓者として進んでいきたいと考えています。

1. “ともしび”の由来	P4
2. コープともしびボランティア振興財団 設立	P8
3. 阪神・淡路大震災復興支援活動一移送サービス	P13
4. ボランティア活動への助成	P15
5. 新たな担い手やグループ育成のための研修・啓発事業	P19
6. ボランティア同士の交流促進	P25
7. 先駆的分野のボランティア活動への支援	P32
8. 様々な組織との協働によるボランティア活動の推進	P37
9. 賛助会費・寄付・募金	P40
みんなで創りたい わたしたちの地域	P44

[参照資料]

1. 設立趣意書	P46
2. 年表	P47
3. 講座・研修一覧	P48
4. 分野別ボランティア活動助成金額・助成グループ数の推移	P50

この記念誌の中でご紹介をしているボランティアグループは、(公財)コープともしびボランティア振興財団のボランティア活動助成を受けている(以前、受けたことがある)グループです。

1. ”ともしび”の由来

コープともしびボランティア振興財団は、兵庫県内のボランティア活動を支援する財団法人として、1996年2月に生活協同組合コープこうべによって設立されました。コープともしびボランティア振興財団の名称にも用いられている”ともしび”の由来は、相互扶助を活動理念とするコープこうべのボランティア活動にさかのぼります。

生活協同組合コープこうべのボランティアの歴史～ともしびグループの誕生

1921(大正10)年、社会運動家である賀川豊彦の指導のもと、「神戸購買組合」「灘購買組合」という2つの組合が誕生し、組合員相互の暮らしをよりよくするための活動が展開されました。組合設立3年後の1924(大正13)年、日本で初めての組合員自身による「家庭会」が誕生し、料理や生け花、和裁、洋裁、不用品交換会等が催され、家庭会の基盤が固まっていきました。

住吉地区では、友生養護学校の学校図書を充実させようと、組合員の家にある本を持ち寄って寄贈。冊数が増えてくると、皆が力を寄せ合って本棚を寄贈する活動が続きました。また、先生方と地域住民の懇談の場をつくろうと、手作りパーティを企画する等、ボランティアという言葉が世間一般になじまなかった頃から、あたたかい心のこもった活動が展開されました。そのほか、青谷・垂水・伊丹・宝塚地区等でも、養護施設や福祉施設の訪問を通じ、施設で必要とされるお手伝いや子どもたちとの交流が続けられました。



料理講習会

1962(昭和37)年、「神戸購買組合」「灘購買組合」が合併し、「灘神戸生活協同組合(現 生活協同組合コープこうべ 以下コープこうべ)」として組合員4万6千人を擁する大生協となりました。同年、兵庫県内各地で広まっていた施設訪問等、組合員の自発的ボランティアグループが、「ともしびグループ」としてまとまりました。

ともしびグループの活動と「ともしび拠金」

「ともしびグループ」は、メンバーを増やしながら、福祉について学びあったり、活動資金を作り出すために手づくり品のバザーを行うなどして活動を続けました。

1966(昭和41)年、神戸新聞平和賞を受賞した田中俊介組合長(当時)は、副賞である5万円を家庭会の福祉活動のために寄付し、それがもとになり「ともしび拠金」がつくられました。副賞に加え、個人やグループからの寄付が続けられ、ともしび拠金は財団設立まで地域のボランティ



手づくり品がたくさん寄贈された
”ともしびセール”(1962(昭和37)年)



ともしびバザー風景

ア活動を支えました。

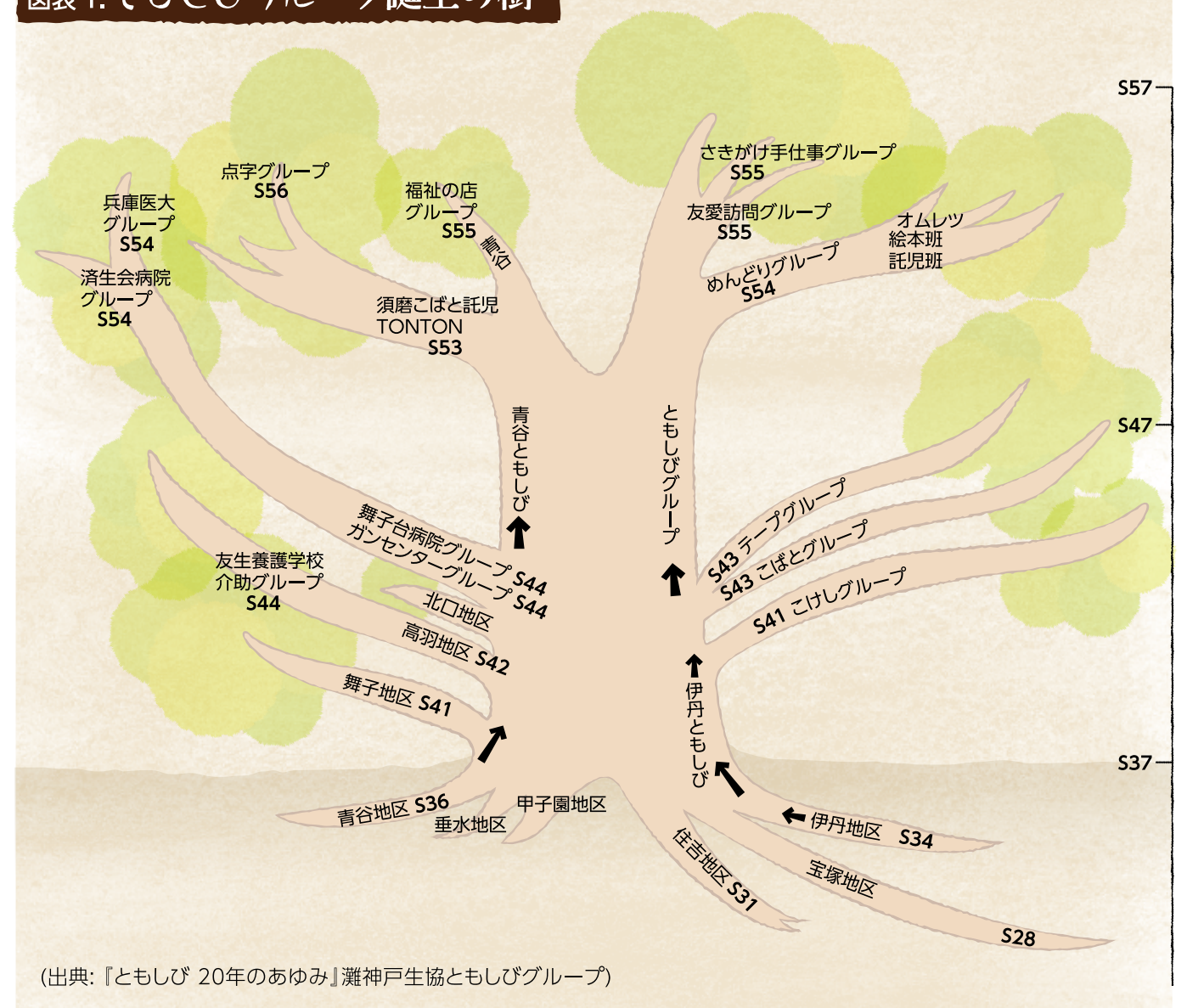
1970年代に入り、ボランティア活動も多様な分野へと広がりました(図表1参照)。人形劇、手でみる絵本づくり、視覚障がい者のためのテープづくり、点訳、病院ボランティア、若い母親のための託児、文庫活動、拠金づくりのための手仕事など、グループの増加とともに地域も広がりました。



1968(昭和43)年 テープライブラリー開始



図表 1. ともしびグループ誕生の樹



ともしびグループ紹介

ともしびグループとして長年にわたり活動をしているグループの中から「ともしびこけし」「ともしびテープグループ」「ともしびこぼとグループ」「賀川記念館おやつ作りグループ」という4つのグループをご紹介します。

創立50年という歴史をもつボランティア人形劇サークル

「ともしびこけし」

1966(昭和41)年3月、手仕事の好きな主婦が集まって活動を始めました。コープこうべの青少年活動からの依頼もあり、温かみのある手作りの人形でほのぼのとした人形劇を演じて、子どもたちに夢を届けたい、そんな思いで「ともしびこけし」は誕生しました。

それから50年、メンバーの入れ替わりもありましたが、幼児から高齢者まで、楽しんで観ていただいて私たちなりにやり甲斐を感じています。

神戸市内(東灘区・灘区中心)の児童館、保育施設、高齢者施設など年間10数か所で公演をしています。マンネリ化しないように常に工夫をし、オリジナルの新作を考えたり、プロの公演を観て参考にすることもあります。

メンバーの高齢化という難題も立ちはだかっていますが、今後も観てくださる方の笑顔を励みに、さらに多くの方々に愛されるとともしびこけしの「人形劇」を目指していきたいと思っています。



季節に合わせた人形劇や音楽劇などを行っています



音楽劇『どうぶつえんへいこう』



脚本や人形、舞台装置など、すべて手作り

手で見える絵本づくり

「ともしびこぼとグループ」

1968(昭和43)年9月、神戸新聞に「絵本はもうこないの?」という見出しで神戸市立盲学校の子どもたちが絵本を求めている記事が出ていたことを機に、「目の不自由な子どものための絵本づくりグループ」を結成。昭和46年5月に「こぼとグループ」と改名し、目の不自由な子どもたちへの絵本や遊具の製作をしています。当初4人のメンバーでスタートしましたが、50年近くたった今ではメンバーが15名に増えました。

活動を始めたころ、神戸市立盲学校を訪ね、どのように表現すると子どもたちにわかってもらえるのかを福来先生に教えていただきました。また、その頃は絵本づくりに必要な材料の助成もいただいていたので、デパートや病院を訪れて荷造り紐やレントゲン台紙などの絵本の材料を提供してもらったり、毎日のように絵本の材料を探し廻っていました。

活動を続ける中、少しずつ絵本の数も増えてきました。多くの方に活用していただきたく、作成した絵本の貸し出しも行っています。



メンバーで話し合いながら絵本づくり



最初に作った絵本「青い目のこねこ」



墨字はメンバーが、点字は点訳グループ・ブレイユに協力をいただき作成しています。

学童保育の子どもたちへ手作りおやつ

「賀川記念館おやつづくりグループ」

手作りのおやつを共働きの多い地域の子どもたちに届けていきたいと、1983(昭和58)年2月、コープこうべ『きょうどう』を通じた呼びかけによってお菓子づくりの好きなメンバーが集まり、学童保育「ひまわり学級」のおやつ作りがスタートしました。

賀川記念館が休館となる毎週月曜日に、4階のカフェラウンジで、メンバーが4グループに分かれてそれぞれがレシピを考えて作っています。担当の先生と定期的に情報交換しながら、また連絡ノートで子どもたちの反応をチェックしながら、メニューを決めています。秋にはお月見団子、ハロウィンにはかぼちゃケーキと季節感を味わえるような工夫も…。午前中におやつづくりをするので、ふだんは子どもたちと接することがありませんが、夏休みには子どもたちと一緒にお菓子づくりをして、ふれあいの場をもつようにしています。

1990年には記念冊子を作成。想い出のおやつや子どもたちの人気おやつベスト5、ボランティアのお勧めお菓子などを紹介。時代は大きく変化しましたが、子どもたちの楽しそうな笑顔は、今も最高のプレゼント。

ボランティア活動は楽しく誰でもできる活動であり、次の世代にバトンタッチできるよう、これからも愛情のこもったおやつ作りを続けていきたいと思っています。



目の不自由な方に声の情報を届けるボランティア

「ともしびテープグループ」

1968(昭和43)年8月、私たち「ともしびテープグループ」は灘神戸生協を母体とするボランティアグループの一つとして誕生しました。「声の図書 日本赤十字奉仕団」主催の朗読講習を受け、目の不自由な方に楽しんでいただける情報や話題をお届けするため、テープ(CD)制作を続けてきました。

朗読講習が終了し、目の不自由な方々に楽しんでいただける情報や話題を提供することを心掛け、神戸発信の月刊テープ「花時計」、月刊誌「PHP」の制作に携わり、メンバー個人の活動として川柳誌「ふぁうすと」や単行本の音訳・録音も行っています。月1回、さまざまな文章や詩を用いての朗読や音訳の勉強会を開催する他、リスナーの方たちとも毎年交流会を持ち、テープ(CD)についての意見や感想、ニーズを聞かせてもらいながら、活動を続けています。

年4回、グループのオリジナルテープ(CD)として、季刊『旅』も制作しています。メンバーが四季折々に訪れた国内外の場所の紀行文、旅に関するエッセイ、現地施設の方へのインタビューなど、時には旅先で鳴り響いていた鐘の音をBGMとして活用したりしながら、メンバーの目線や感性でご紹介をしています。

活動を続ける中、録音のデジタル化という大きな流れもありましたが、CDを楽しみに待っていてくださる方がおられますし、少しずつ前に進んでいければと思っています。



2. コープともしびボランティア振興財団 設立

阪神・淡路大震災とボランティア活動

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が起こりました。一瞬にして多くの貴い命が失われ、兵庫県内に甚大な被害をもたらしました。

テレビや新聞、ラジオ等のニュースで被災地の惨状を目の当たりにし、「何か自分が役に立てることはないか」と、全国各地で震災直後から多くの声が上がリ、やがて大きな救援・支援の力になっていきました。



震災によりコープこうべ本部も倒壊



組合員による炊き出し活動

阪神淡路大震災が起こった1995年には、137万人を超えるボランティアが被災地に駆けつけました。

しかし、「役に立ちたい」という思いはあっても、どこに行けばいいのか、どんな支援が求められているのかという情報を取りまとめる機関がほとんどなかったことから、貴重な善意が生かされないという問題が指摘されていました。これに対しコープこうべでは、ボランティアに意欲を持つ人々と支援を求める人々とのコーディネート的重要性に着目し、1995年1月26日、生活文化センターにボランティア支援窓口を開設しました。2月3日には「コープボランティア本部」を設置。各地区本部でも8つのコープボランティアセンターを開設し、ボランティア活動への強力なバックアップを図りました。

高齢者福祉活動を続けてきたコープこうべでは、これまでの経験から、仮設住宅にこそボランティアが必要だと認識。一戸一戸高齢者の住まいを訪ねる安否確認、仮設住宅周辺の生活マップづくり、給食配布、イベント開催など、仮設住宅の支援活動にも積極的に取り組んでいきました。



仮設訪問活動

コープこうべが長い歴史の中で大切にしてきたのは「愛と協同」の精神でした。悲しみを乗り越え、緊急の場を切り抜けられたのは、地域社会の中で助け合い、支え合う協同の精神が根付いていたからだといっても過言ではありません。

震災直後から被災地の課題に対応したグループが生まれ、今なお活動を続けています。

復興住宅集会室にてふれあい喫茶を開催

「コープ木曜会」

震災を機に、六甲アイランド第六仮設住宅ふれ愛センターにて5年間、毎月2回、仮設住宅への友愛訪問および仮設住宅集会所での喫茶や小物作りなどのミニイベント活動を行っていた「木曜友愛グループ」。

仮設住宅が解消された後は、「コープ木曜会」という名称に変更し、市営北畑住宅5号棟の集会室にて、今も活動を続けています。

活動を続ける中、復興住宅の住民のほか、地域住民の方もふれあい喫茶に参加してくれるようになり、今では利用者が15～16名います。中には、自分から外に出てこれない方もいて、ご自宅を訪問してふれあい喫茶にお連れしています。また毎回、楽しみに活動を待っている障がいをお持ちの方、高齢の方もいます。一人でも会に来てくださる方がいる限り、活動は続けていかなければならないと感じています。



市営北畑住宅5号棟

阪神・淡路大震災をきっかけに、高校生や大学生といった若い人たちの間にもボランティア活動の輪が大きく広がりました。素早い行動力で、柔軟なアイデアを生かしながら被災地の復興に若い力が注がれました。

震災以降、子どもキャンプや不登校支援など学生主体の活動を展開

特定非営利活動法人ブレンヒューマニティー

ブレンヒューマニティーは、大学生が主体となって運営する非営利組織です。阪神・淡路大震災直後の2月、関西学院大学の学生たちが被災した子どもたちへの家庭教師をボランティアとして開始。受験シーズンが終わった4月ごろから、活動を通じて子どもたちから「野外活動がしたい」という声があり、キャンプなどの活動をスタート。2000年以降は海外ワークキャンプも実施してきました。また1999年には、活動の中で不登校の子どもと出会ったことをきっかけに、不登校の子どものための学習支援を展開。「友だちがほしい」という不登校の子どもたちの声から事務所内にフリースペースを開設しました。2000年には学生主体として全国初となるNPO法人格の認証を受けています。

活動を始めて20年経った今、キャンプや不登校支援事業の他、大学生や若者が地域や社会とつながるための場として運営する「地域のまつり」などの企画・運営、障がい児や生活困窮家庭の支援事業など、活動をする中で見えてきたニーズに合わせながら、はば広い領域の活動を行っています。

学生ボランティアは常時900人以上。これからも、若者たちに多様な生き方の選択肢、多様な価値観を提供するための環境づくりを進めていきたいと考えています。



コープともしびボランティア振興財団設立の経緯

阪神・淡路大震災を契機として、ボランティアの輪がさらに広がり、その役割の重要性があらためて認識されました。

このような機運に呼応し、ボランティア活動を誰もが参加できる市民活動として定着させ、兵庫県をボランティア先進県とするためには、ボランティア活動に対する資金的な支援が不可欠であるとコープこうべは考えました。しかし、生協としては組合員という領域に限定されるため、幅広く兵庫県内のボランティア活動を支援できる組織が必要でした。そこで、1995年6月9日、コープこうべの第75期通常総代会にて、「財団法人ともしび(仮称)」の設立を決議し、準備を進めました。同年8月12日には、設立に向けて「第1回意見交換会」が開催され、ボランティアグループの世話人や組合員代表から、「ともしび拠金の理念を大切に」「独自性のある財団にして」「人材育成にも力を入れて欲しい」などの意見が出されました。

1995年9月1日、第1回「財団法人”ともしび”(仮称)設立準備委員会」を開催。野尻武敏理事(当時)を委員長として、外部の専門家にも参加いただき、以下のような現在につながる意見をいただきました。

- ① ボランティア活動を市民活動にしていくような事業の実施
- ② 一律助成にしないこと
- ③ 生涯学習とボランティア学習を同時に進めることが必要
- ④ 運用財産を集めるしくみづくりが必要
- ⑤ 福祉だけでなく、幅広いボランティア活動を振興することが必要

その後、コープこうべの定例理事会や福祉文化事業委員会(当時)、各種会議を経て、1996年1月下旬に「財団設立発起人会」が発足。2月に設立許可申請書を兵庫県に提出し、同年2月16日に「コープともしびボランティア振興財団」が設立されました。



1996年2月16日 コープともしびボランティア振興財団設立

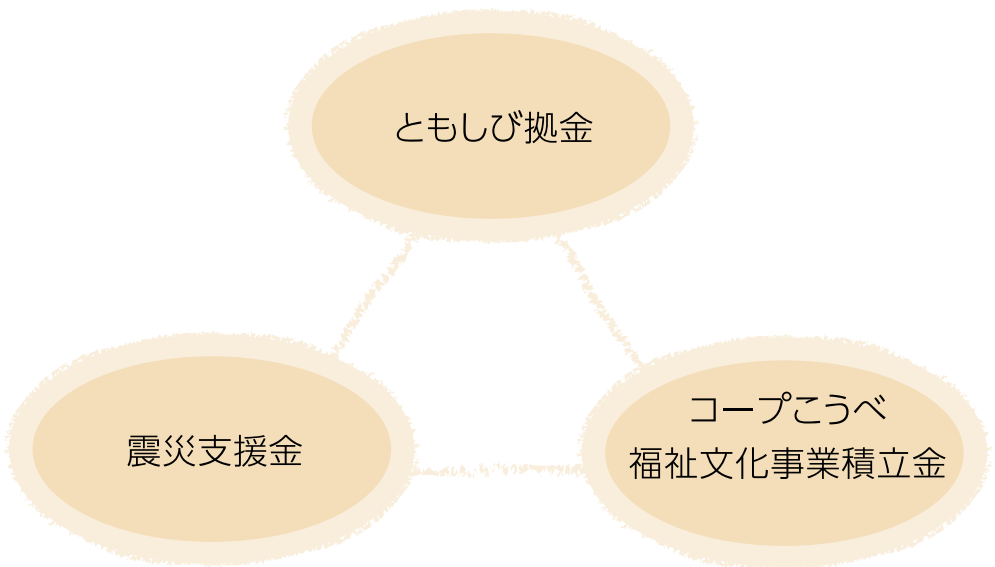
ともしび財団の基本財産

ともしび財団設立の基本財産は3つの蓄積です。

一つは先述した「ともしび拠金」です。ともしび拠金は、「ともしびグループ」による手作り品などのバザーの売り上げや寄付金などによって、積み上げられていました。

もうひとつは全国の生協仲間をはじめ、多くの取引先からいただいた震災見舞い金です。

3つめはコープこうべ本来の経理の中で毎年積み立ててきた福祉文化事業積立金です。これら3つが合わさり、計7億円をコープともしびボランティア振興財団の基本財産として運用することになりました。



ともしび財団の事業スタート

ともしび財団では、地域福祉の向上やボランティア活動の振興を図ることを目的として、事業活動の柱を以下の4つとしました。

- 1. ボランティア活動への助成(資金支援)
- 2. ボランティアにかかわる研修・講座の実施(人材育成)
- 3. ボランティアに関する情報収集および提供(情報支援)
- 4. ボランティアに関する普及啓発・交流

ともしび財団が設立された直後の1996年4月に、震災をきっかけに立ち上がったボランティアグループなどに活動助成を開始。初年度は274グループ(人)に1,126万円の助成金の交付を行いました。

図表2. 1996年 ボランティア活動助成の内容

活動内容	件数(件)
病院・施設等訪問	60
手芸品等製作・バザー	52
震災支援	50
食事サービス	37
視聴覚障害者への活動	24
本貸し出し・読み聞かせ	8
資格・技能を生かした活動	7
その他	36
計	274件

またボランティア活動助成のほか、ボランティア啓発・研修事業も1996年度にスタートしています。

「生きがいを見つけませんか」講座と題し、地域社会への関心、仲間づくり、社会貢献などの価値を盛り込んだボランティア育成講座も始めました。そして、阪神間の福祉施設とのつながりをつくりながら、共同作業所の商品を、財団事務所のあったコープリビング甲南（神戸市東灘区）で供給したり、地域の施設でのボランティアニーズをコーディネートするなど、地域密着型の活動をすすめました。

さらに、ボランティアグループや個人ボランティアのニーズにあった情報提供をと、1996年5月25日から『ともしば通信』を刊行し、ボランティアグループの活動紹介やボランティア情報の発信などを行っていくことになりました。



3. 阪神・淡路大震災復興支援活動 ― 移送サービス

移送サービスに着手

コープとともしばボランティア振興財団は1997年2月～2003年3月までの6年間、車いすのまま乗ることができるリフトカー2台を活用し、震災後の通院などのカーボランティアによる移動支援を行いました。

リフトカーの一台は日本財団から寄贈され、もう一台は「養護学校を卒業して不要になったので」とご寄付いただいたものです。

カーボランティア（のべ2,016名）の熱意に支えられた活動の利用者は7,666名にものぼります。6年間の走行距離は107,094km、延べ時間は5,577時間となりました。

一人でも多くの方にご利用していただけるようにと、移送サービス活動を行っていた団体間のネットワークもつくられました。

ともしば財団の移送サービス活動は、足が悪くて公共交通機関を使用して移動することが困難な高齢者や障がい者、要介護者の通院や施設への通所などを支援しただけでなく、兵庫県内における移送サービスの振興にも寄与しました。

移送サービス以外のボランティアも・・・

この移送サービス活動に関わってくださったボランティアの総数は101名。定年退職後の人や休日を活用しての会社員、主婦等々、様々な方に支えていただきました。表札がなかった家にお手製の表札を掲げたり、利用者を施設に送った後、お迎えまでの時間に高齢者施設の入居者の髪を切ったり、送迎先の福祉施設でパソコン指導をしたりと、移送サービスにとどまらず、それぞれの特技を生かしたボランティア活動も行なわれました。

しかし、国土交通省のボランティア移送活動に対する考え方の転換、タクシー会社の移送事業との関連で、活動継続には専門的な関わりが求められるようになり、やむを得ず2003年3月に兵庫県移送サービスネットワークに移管しました。

図表 3. 移送サービス実績

	移送件数	移送人数	ボランティア人数	走行総距離km
1997	259	1,280	180	16,630
1998	291	1,331	404	19,335
1999	273	1,355	397	18,611
2000	411	1,439	380	17,854
2001	326	1,112	307	15,970
2002	359	1,149	348	18,694
累計	1,919	7,666	2,016	107,094



移送サービス活動の担い手(カーボランティア)として活躍していた人の数名が現在、『ともしび通信』の
 発送ボランティアとして活動しています。当時のお話を伺いました。

司会：カーボランティアに関わったきっかけについて教えてください(敬称略)

藤田：阪神・淡路大震災の時、東灘区森南町に住んでいて家は全壊。上郡に1年避難し、平成8年8
 月に戻ってきたんです。震災で皆さんにいろいろお世話になったからお返しをしたいと思っ
 ていました。コープリビング甲南に買い物に行った時、偶然エレベータにボランティア募集
 の張り紙が貼ってあったのを見つけ、カーボランティアの活動に参加しました。

杉山：賛助会員の手続きをしようとしてともしび財団の事務所に立ち寄ったところ、財団のスタッフに
 「カーボランティアをしてもらえませんか」と声掛けをされて、送迎ならできると思い、活動
 に参加することになりました。

司会：どんな方たちを送迎なさっていたのですか？

古川：特殊車両なので、車椅子の方の送迎がほとんどだったかな。

藤田：病院とかに行っていました。

杉山：施設にも行っていましたね。

藤田：宝塚から淡路のサービスエリアまで行ったこともありましたよ。

古川：須磨の水族館とかしあわせの村にもよく行きましたよね。

藤田：入浴サービスということで、お風呂屋さんにも行ったかな。淡路のサービスエリアに行った
 時は事前にマイカーで一度下見してきたんですよ。眺めのよい場所を先に調べておいたと
 いう話を施設の方にしたら、「そんなことまでしていただいて非常にありがたい」って言われ
 て、ともしび財団にお礼状が届いたと聞きました。

司会：杉山さんは何か印象に残っていることはありますか？

杉山：六甲山の上にある障がい児さんの施設に送迎に行った時、とても長い上り坂があって車が
 上がらないこともあったんですよ。オーバーヒートしたので冷やしてなんとかかたどり着いた
 んです。

司会：ご苦労されたこと、いろいろあったんですね。

杉山：教えていただいた住所を頼りに家を探していかなければならなかったのは大変でしたね。
 あの当時はカーナビもなかったですし、地図だけが頼りでしたしね。携帯がなかったらどうに
 もならないと思って携帯を買ったのですよ。

司会：発送ボランティアはいつから始めてくださったのですか？

藤田：ともしび財団が移送ボランティアをしなくなりすぐ発送のお手伝いが始まったと思います。

桑原：僕はカーボランティアをしてなかったんだけど、カーボランティアをしていた方から誘いを
 受けてともしび通信の発送ボランティアを始めたのですよ。その方とは今でもいっしょに重
 度心身障がい者さんのボランティアに行ったりしています。

司会：貴重なお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。



古川さん 藤田さん 杉山さん 桑原さん

4. ボランティア活動への助成

1996 年度～ 2015 年度のボランティア活動助成

ともしび財団は、設立当初よりボランタリーな活動グループ(人)への活動助成を事業の大きな柱として
 行ってきました。

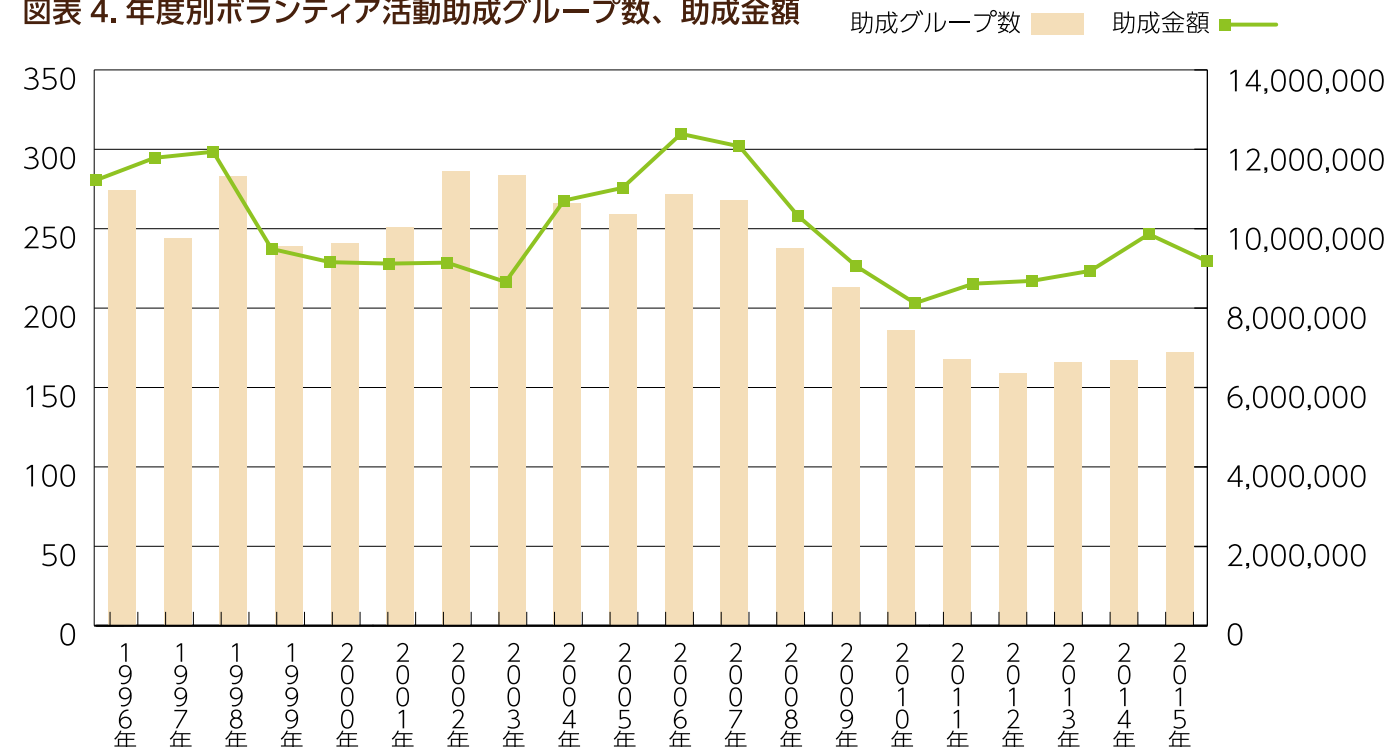
ともしび財団は、「助け合い・支え合う社会をつくりたい」と願う人たちの思いを寄付や募金というかたち
 で集め、よりよい社会づくりに向けてボランティア活動を行っているグループ(人)に助成金として届けてい
 ます。ただ活動資金の仲介をするだけでなく、支援者一人ひとりの思いを活かすために、ボランティアの成
 果によって社会をどのように支え、変わっていくのかを見届け、「ともしび通信」などを通じて発信していく
 ように心がけています。

1996年度～2015年度の20年間にわたるボランティア活動助成グループはのべ4,636グループ・助成
 金総額2億21万1,141円にのぼります。年度によって助成グループ数や助成金額に多少の差異はありま
 すが、できるだけ多くのボランティアグループ(人)を支援していきたいという設立当初からの思いを活か
 しながら、ボランティア活動助成を続けています。

ボランティア活動助成実績一覧

項目	実績
助成件数(採択件数)	のべ 4,636 グループ
申請グループ数	787グループ(個人3含む)
助成グループ数	702グループ(個人3含む)
助成総額	200,211,141円

図表 4. 年度別ボランティア活動助成グループ数、助成金額



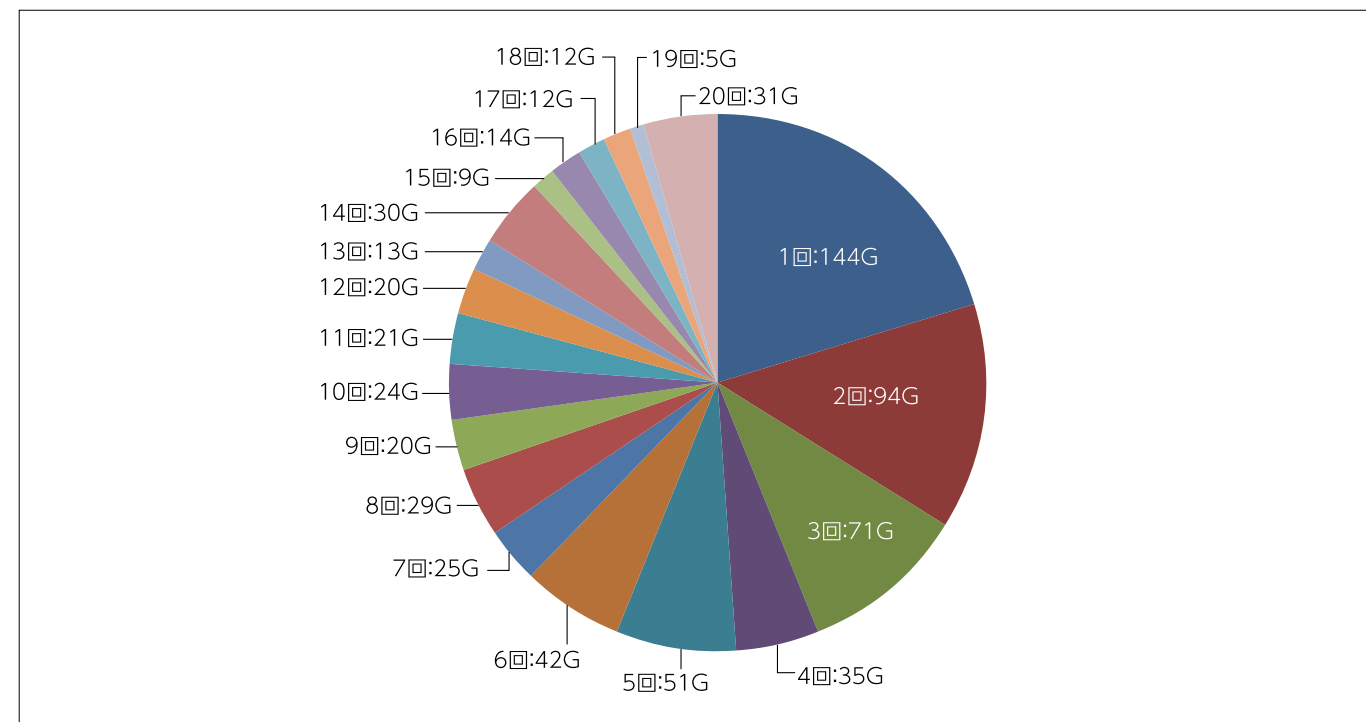
ともしび財団のボランティア活動助成の特徴

ともしび財団のボランティア活動助成金額は、1件30万円までと、他の助成団体と比較すると少額の助成となっています。これは地域の暮らしに根ざし、できるだけ多くの活動を応援していきたいという思いがあるからです。対象は、法人格を持たない任意団体としており、小さくともキラリと光る活動をしているグループを応援しながら、共に発展していくことを目指しています。

また、ともしび財団の助成は助成対象期間の前年に説明会・申請の受付・審査を行い、助成を希望している年度当初の4月には助成の有無が決定し、6月初旬までに助成金を交付するしくみとしています。ボランティアグループの立替負担をなくし、安心してグループ活動を始めてもらいたいという願いからです。

ともしび財団は「愛と協同」の精神を基盤に、ボランティアの輪を広げ、やさしさと思いやりに満ちた地域社会の形成をめざすことを活動の目的としています。活動の種が撒かれてボランティア活動がスタートしたとしても、資金難が理由となり、継続的に活動ができず、グループ自体の存続ができなくなり、ボランティア活動自体が枯れてしまうことは残念なことです。そこで、小さなボランティアグループが安心して活動を継続できるように、活動助成の申請があれば、期限を設けることなく、活動助成を続けて受けることも可能としています。図表5の通り、10回以上ボランティア活動助成を続けて受けているグループが、全体の1/4を占めており、5回以上ボランティア活動助成を受けて活動しているグループを加えると全体の1/2を占めています。このような継続助成を可能にしている財団は他にあまりなく、ともしび財団の大きな特徴のひとつとなっています。

図表 5. 助成グループにおける 2015 年度までのボランティア活動助成回数



(助成グループにおける 2015 年度までのボランティア活動助成回数の円グラフ)

助成してきた主な活動分野

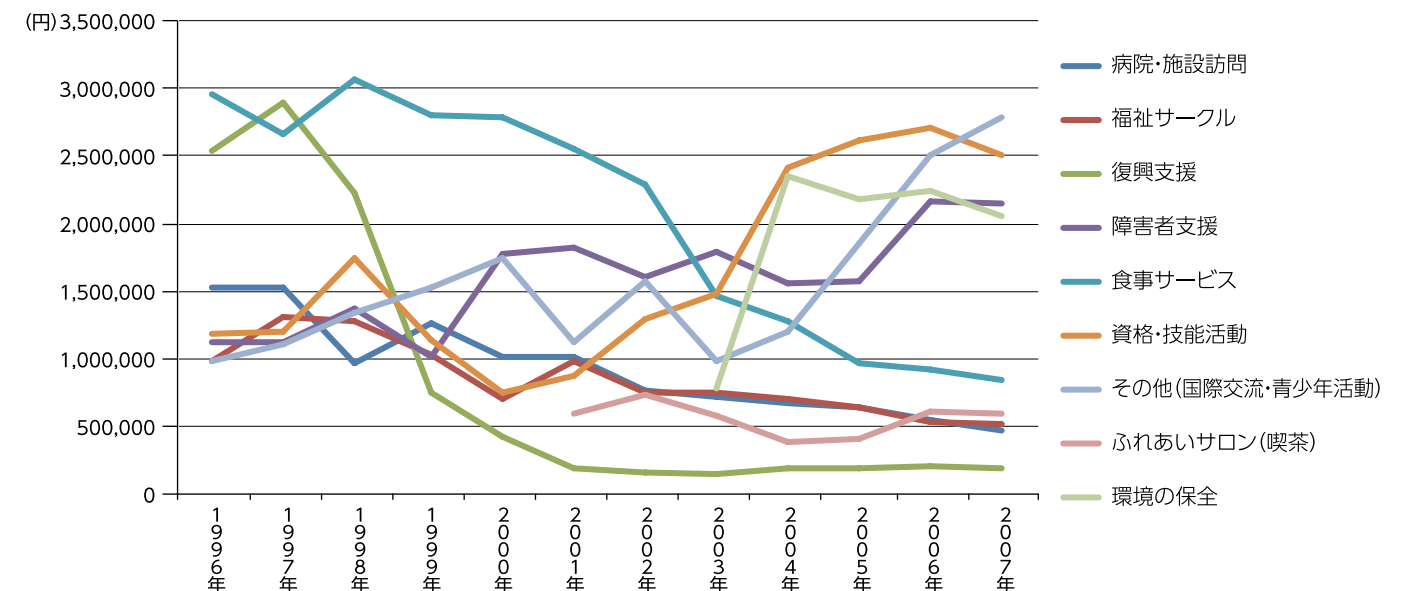
活動分野の傾向をまとめたグラフが図表6-1.および図表6-2.の分野別ボランティア活動助成金額の推移です。

復興支援に携わるボランティア活動助成金額は2000年1月、阪神・淡路大震災における応急仮設住宅が解消されたことを契機に大きく減少しています。2000年以降、復興支援を行っていたグループは仮設住宅でのボランティア活動の体験を活かし、地域住民を対象としたふれあいサロンを開設したり、新たなボランティア活動を生み出すなどしています。

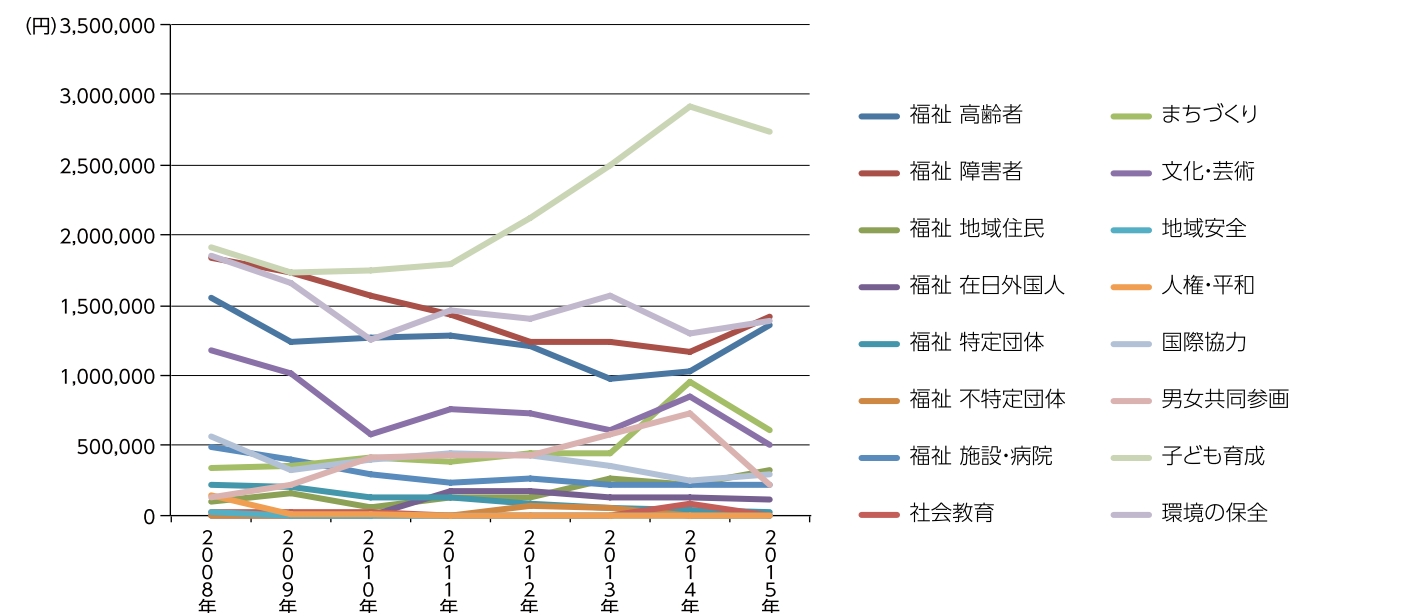
そして2003年以降は、資格や技能を生かしたグループや国際交流、青少年活動を行うボランティアグループが増加し、助成金額もそれに伴い大きく伸びてきています。

さらに近年、高齢者の消費者被害や一人暮らし世帯の社会的孤立などがマスコミによって伝えられることが増えたこともあり、高齢者の見守りにつながる活動を充実させる動きが少しずつ広がってきています。2013年以降は高齢者・障がい者福祉のボランティア活動助成金額が年々増えています。最近では、子どもを社会の中で育てていくという流れも受け、子ども育成に関するボランティア活動助成金額も増えてきています。

図表 6-1. 分野別ボランティア活動助成金額の推移 (1996 年～2007 年)



図表 6-2. 分野別ボランティア活動助成金額の推移 (2008 年～2015 年)



※2008年以降はNPO法人活動分野と合わせた分類に変更しています

環境分野への支援

2002年度に、コープこうべの買い物袋持参運動で積立てられていた「買い物袋代金の一部」がともしび財団に寄付されたことで、環境分野へのボランティア支援を強化しました。そして2003年から2015年までの13年間に、環境ボランティア活動を行っている、のべ440のグループに対して総額2,148万3,584円の資金助成を行いました。

自然観察が楽しめる森づくり

コミュニティひばり環境部会

元ゴルフ場やレジャー施設があったところが荒れていて、マンションや住宅地になってしまうとこのまま自然に戻ることはありえないと思い、「私たちが手入れをするので土地取得をしてください」と宝塚市に署名を集めて願い出て、保全緑地として森を取得。2007年より森林ボランティア活動がスタートしました。

30年近く手入れされていなかった土地は最初、クズがはびこり、不法投棄のタイヤやバイクもあり、それらを引き上げるところからのスタートでした。メンバーは80名。森の手入れ作業に関わっている方、農園やハーブ園に関わっている方もいます。

遊歩道の草刈り等の維持保全を定期的に行うことで、里山を再現し、多くの方が自然に接し、親しめる場となりました。

散歩道の他に草原もあり、環境学習で地元の小学生も学びにきます。私たちも子どもたちといっしょに森の中を歩いたり、虫を探したりして楽しんでいます。さらには、知的障がい者の施設である「さざんか福祉会」の野外活動体験の受け入れもしており、手つかずとなっていた荒地をいっしょに整備して農園とし、そこにハーブを植えたり、タマネギやサツマイモなどの収穫をしたりしています。



子どもたちの環境学習をサポート

山田の里グリーンクラブ

代表の西本さんは定年退職後、兵庫県「ふるさとひょうご創生塾」でコミュニティづくりについて学び、2003年11月、16名の会員で森林ボランティアの「山田の里グリーンクラブ」を設立しました。

通常活動として林内の下草刈り・間伐・枝打ちなど里山林の手入れ、棚田の復旧と再生として古代米・各種野菜・椎茸などの栽培、カブトムシの飼育などを行っています。

特別活動として、中学2年生の「トライやるウィーク」で2校の生徒を受け入れるほか、小学3年生の「環境体験学習」、親子参加の「体験型環境学習」として、里山で遊ぼう～収穫祭と昔遊び～で芋掘り・木工教室・竹馬づくりなど年3回実施しています。また、山田の里の「野草花図鑑」「キノコ図鑑」「木の葉図鑑」を発行し、地域の子どもの教材として使っていただいています。

2015年3月、活動地を「山田の里・学習の森」として、地域の方々の森林体験学習のフィールドとして活用して頂きたく出来るだけサポートしたいと思います。通常活動は、毎月4日前後活動していますが、安心安全を心がけ、山田の里の「景観保全と文化の継承」を視野に入れた活動をこれからも続けていきたいと思っています。



トライやるウィーク



親子参加の芋掘り①



親子参加の芋掘り②



サツマイモの収穫



5. 新たな担い手やグループ育成のための研修・啓発事業

ともしび財団は設立当初からボランティア活動における人材育成を事業活動の柱の一つに掲げ、多様な研修事業、啓発等を行い、新たな担い手、グループを支援してきました。

ボランティアの担い手の拡がり

ともしび財団は設立直後から2015年3月末までに、ボランティア人材の育成を目的に195講座を開催し、6500名を超える人たちが参加しました。

財団が設立された当初は、「生きがいを見つけませんか」講座(1997～2000年)など、地域でのボランティア活動に踏み出すための手助けとなるボランティア入門講座を開催しました。

一人でも多くの若者がボランティア活動に目を向けてくれることを願い、長年にわたり取り組んだのが、「長期休暇ボランティア体験」学習(1998～2006年)です。夏休みを中心に、中高生、大学生に福祉施設でボランティア体験をしてもらう企画でした。核家族が増え、高齢者に接することの少ない若者にとって、高齢者施設での体験は戸惑いもありましたが、ボランティア活動に踏み出すきっかけになりました。

また、仕事中心の生活を送ってきた男性は地域での暮らしが基盤となる定年退職後を、どのように過ごしていくかがひとつの課題です。そこで、退職後に地域での活動を希望している男性を対象として、2000年から「男性ボランティア入門講座」を開催するなど、男性のボランティア参加を促す啓発・支援を行ってきました。

特養などの施設で車椅子掃除のボランティア活動

「ミスターエイト」

コープこうべによる男性のボランティア講座があり、20名ほどが参加。車いすの押し方やお年寄りへの接し方など4回講座の後、1999年8月にグループ「ミスターエイト」が誕生しました。

グループの中心的な活動は車いす掃除のボランティア。10～15台の車いすをお風呂場できれいに磨きあげていきます。ブラシを持って車椅子についたごはんのカスなどを水洗いで落とし、消毒をしながら水気をふき取ります。また、緩んだ車椅子のネジを締めたり、虫ゴムを交換して、タイヤの空気の調整をはかっています。見違えるほど美しく仕上がった車椅子は施設利用者の方にとっても喜ばれています。

車椅子の掃除の後はブルーのお揃いの作業服から着替えをし、施設利用者とのふれあいの時間を始めます。メンバーが得意なことを活かして、レクリエーション体操、紙芝居、南京玉すだれ、皿まわし、童謡や六甲おろしをみんなで合唱したり、楽しい交流の時間を持っています。



車椅子の整備・清掃



また、男性がボランティア活動に積極的に参加をすることで、現役時代に培った経験を地域に還元するグループもでき、多彩なボランティア活動へと広がっています。

未来を担う子どもたちに科学の面白さを伝える

「青少年と科学技術を楽しむ会」

子どもたちと共に大人も科学技術を楽しもう、実験や工作をしようという活動をしています。メンバーは電機メーカーの企業などの現役、OBが中心です。

1990年代に子どもの理科ばなれが言われ出し、「私たちに何かできることはないだろうか」と関西アマチュア無線のメンバーで話していた時に、青少年科学館での科学の祭典に出展する機会があり、グループが立ち上がりました。その後、コープこうべや神戸市教育委員会などからも声がかかり、実験や工作を行うようになりました。身近な材料での電池づくりやラジオの製作、ロボットづくり等、子どもたちが作りやすくして再現性・達成感のあるプログラムの提供をしています。

子どもの反応は我々の子どもの頃と同じです。最近は電子パーツを扱っている店も少なくなり、何かをやろうとするチャンスが今の子どもたちから奪われがちです。チャンスを与えることで、子どもたちは目を輝かせて喜んで取り組みます。いろいろな学校の子どもたちが集まってくることもあり、同じことに関心をもつ友だちの輪も広がっています。



無線機を使って通信実験をする子どもたち



不思議な光通信を体験!!



センサーマイコンでコンピュータを知る

新たなグループの創出

ボランティア活動への参加を積極的に促すため、朗読や紙芝居、視覚障がい者の外出介助、子育て支援といった技能を学ぶ講座も企画しました。

技能を学ぶ講座の中で特に反響が大きかったのは、2002年から始まった傾聴講座です。震災以降、「誰かの役に立ちたい」「自分にも何かできるのでは」と感じている人たちが増えてきたこともあり、ボランティア活動に安心して参加してもらうために、対象者に寄りそうための知識と技術を身につけてもらうことを目的として開催してきました。30名の募集定員に対して100名近くの応募があった年もありました。

傾聴とは、相手の話に耳を傾け、ゆっくりと話を聴き、共感し、心を開いてもらうことです。高齢化社会を迎え、在宅ケアにも関心が高まる中、ボランティア活動には欠かせないものであり、10年以上にわたり、多くのボランティアを育てる講座になりました。講座を続ける中で、「もっと傾聴技術を磨きたい」という参加者からの声に応え、ともしび財団とコープ活動サポートセンター（現、コープこうべ地区活動本部）が協働し、傾聴のフォローアップ研修も開催してきました。

傾聴講座の受講生から、「マーガレット」「りぼん」という2つのボランティアグループが誕生しました。また、兵庫県内の2つの高齢者施設からも傾聴ボランティアを求める声がともしび財団に寄せられ、高齢者の話し相手となるボランティアを希望していた受講生につながっていくこともできました。

その他にもともしび財団が開催した講座から、多くのボランティアグループが誕生しています。

開催講座	講座を機に誕生した活動グループ
鎮守の森のボランティア講座	あそびの縁日
読み聞かせボランティア講座	読み聞かせの会ちょこっと
わくわく!科学実験教室	KOBEサイエンスクラブ
紙芝居ボランティア講座	おやゆび姫
拡大写本ボランティア養成講座	拡大写本ボランティアグループなでして 拡大写本はなみずき
チャレンジ!寸劇講座	座・びっくりばこ

おもちゃづくりの楽しさを伝えたい

「あそびの縁日」

2002年10月、ともしび財団が開催した「鎮守の森のボランティア講座」の修了生有志5名で始めた「あそびの縁日」。今では退職した男性を中心に、メンバーは14名に増えました。

どこの家にもあるような不用品を利用して、手作りのおもちゃをつくります。幼稚園や神社のお祭りに出向き、子どもたち自らが作るおもちゃで遊ぶ楽しさを、伝えています。

「僕がつくったおもちゃだよ」と言ってうれしそうに寄ってくる子どもをみるとうれしく、遊びをきっかけとして地域の人たちがもっと交流し合えることができたと思っています。



尼崎市富松神社

対話ができる紙芝居をどんどん広めたい

「紙芝居サークルおやゆび姫」

講座をきっかけに、2006年1月紙芝居サークル「おやゆび姫」を結成。「健康で明るい時を共に過ごすこと」を目標として、年間70回程度、高齢者施設や地域福祉センター等で紙芝居を演じています。

昔懐かしい紙芝居や懐かしの歌を参加者の皆さんと一緒に歌いながら、「楽しかった、また来てね」「今度はこんなものにしてね」というリクエストをいただいたり、「次まで元気です!」という言葉のやりとりを励みに、勇気をいただいています。

一人で活動するのは難しいけれど、共通の思いを持った人たちが集まって共に練習や施設等での活動ができることは楽しいし、紙芝居を演じている時間は明るく幸せな気持ちになります。相手の反応を見ながら対話を楽しめるのは紙芝居ならではの魅力であり、素晴らしい出会いを生み出す紙芝居をもっと広めていきたいと思っています。



紙芝居で笑顔と感動を共有



和気あいあいと紙芝居について話し合うメンバー

2003年には、コープこうべの買い物袋代金の一部を環境分野助成に活用していくことを機に、コープこうべと共に環境ボランティアフォーラムを開催しました。その後、「環境ボランティアグループ立ち上げ支援講座」など、環境をテーマとしたボランティア活動を促進する講座を開催してきました。

さらに、ボランティア活動を発展させていくための講座、ボランティア活動の資金調達について具体的に学べる「助成金獲得講座(2002～2004年)」や「ボランティアリーダーのためのコーディネーター講座(2005年)」を開き、ボランティア活動の展開をはかれるよう試みました。

2009年には、コープ活動サポートセンター住吉(現第3地区活動本部)と共催で、「ボランティア相談サロン」を始めました。ボランティアを始めたい方だけでなく、「少し先のライフワークとして社会に役立つことをしたい」「海外生活で身につけた語学(会話力)を役立てたい」など様々な動機で訪れる方がありました。来訪者の思い、居住地、活動希望地なども考慮し、ともしび財団が助成するグループやコープサークル関連情報、地域の情報を提供。住吉をはじめ、姫路、宝塚などいろいろなエリアで行い、ボランティア経験の有無に関わらず活用されました。

このほか、高齢化社会に向けた講座、認知症の人とのコミュニケーションを学ぶ「バリデーション講座」や「認知症予防啓発講座」等を開催し、高齢者支援の担い手育成にも取り組んできました。

最近では活動助成を受けているグループの中にも、高齢者の課題に取り組むグループが増えてきています。

調査研究助成

ともしび財団では、ボランティア活動の振興および地域福祉の向上には、ボランティア・市民活動を促進するボランティアマネジメントの機能が重要であるとの認識に立ち、2005年度から「ボランティアコーディネートを学び、実践に生かす人のための調査研究助成」を始めました。

この調査研究助成は、大学、大学院などで、ボランティアマネジメント、ボランティアコーディネート、地域福祉、非営利団体の運営およびマネジメント等にかかわる内容を学び、地域実践に還元する社会人を支援し、市民主体の地域づくりに資することを目的としています。

2006年～2014年の9年間に、のべ31名(総額730万円)への調査研究助成が行われ、現在、地域やNPO、大学などで学びを活かして地域コーディネーターとして活躍しています。

毎年、調査研究助成を受けた人が研究内容や成果を発表する「地域をつなぐボランティアコーディネート報告会」を開催しています。

ボランティア活動をしている方や一般市民がテーマへの関心・理解を深め、活動に参加したり、新たな出会い・つながりづくりのきっかけになることをめざしています。



2015年度 地域をつなぐボランティアコーディネート報告会

また、調査研修助成を受けた人が講師となり、研究してきたテーマについて学ぶ講座を2009年度から開催しています。

2009年度は、HIV問題を高校生が同世代に語り伝える活動「るるく」のコーディネーター役を務めてきた高校教員による「エイズ・ピア エデュケーション プレセミナー」を開催しました。

2010年度には、災害時にケガをした人、妊婦、外国人など要援護者に配慮した避難所づくりと避難所の運営方法などを学ぶ「災害時要援護者支援講座」が開催され、講座終了後には、災害時の活動に備えるために、ボランティアグループが結成されました。

その他、ボランティア活動における発達障がいの理解と支援に関する講座や、子育てひろば活動者のためのチームエンパワーメント講座なども開催され、地域の人に学びを還元し、社会的課題に着目したボランティア活動につながるきっかけづくりになっています。



高齢者が健康で自立し、楽しい生活ができるようサポート

チャレサポサクラ

2010年3月から東灘区役所近くの高層マンション1階の貸室で月3回、活動をしています。第2火曜は「うたごえ広場」。第3火曜は「大人のわいわいわくわく広場」、第4火曜は「ギャラリーカフェおちゃにしませんか」という企画を開催しています。

「うたごえ広場」では、会費で作成した歌集からリクエストを受け、70名ほどの参加者全員で童謡から懐メロまで歌います。時にはメンバーが特技を披露し、生きがいにもつながっています。「ギャラリーカフェおちゃにしませんか」は、東灘区のおいしいスイーツとコーヒー・紅茶を出しておしゃべりタイムを設けています。

「大人のわいわいわくわく広場」は最初、ひとり暮らしの人たちの個食を少しでもサポートしようと始まりました。「サンドイッチでもなんでもいいから持ってきてください。一緒に食べましょう」とお伝えしていましたが、来られる高齢者の方は全員、自分で朝、お弁当を作って持ってきています。「何十年ぶりに自分のお弁当を作りました」とワクワクしながらおしゃる方もいます。

高齢になると口にはいけないものや体調もあり、気温があがると危険な場合もあるので、お弁当の交換は原則禁止。栄養士や看護師に入っただきアドバイスもいただきながら、楽しく活動を続けています。



「うたごえ広場」



「ギャラリーカフェおちゃにしませんか」



「大人のわいわいわくわく広場」



これまでに調査研究助成を受けた人の中から、三苫利光さん、宮口智恵さんの活動をご紹介します。

不登校の子どものサポート

三苫利光さん クラーク記念国際高等学校 三田分室 室長・教諭

通信制のクラーク記念国際高等学校に来る生徒の多くは不登校を経験している子どもたちです。彼らはどこかで自分はダメかな、あるいは保護者の方はうちの子はどうなのかなと思っていらっしゃるのですが、この調査研究を通して、「そうではない。不登校をしている子たちの8割以上は魂が素直で純粋、ピュアな心をもっている」ことがわかりました。

そのピュアな心を育て、広い視野とやり抜いたことの達成感、実社会でもやって行けそうだという自信を体得してもらうために、三田分室では、地域社会、及び遠方の事業所と提携し、多彩な社会体験学習のプログラムを取り入れ、希望生徒に提供しています。

夏休みには自宅を離れ、信州のリゾートホテルや牧場で1ヶ月の実習があり、参加した生徒は、関わりの中で成し得た達成感と充実感によって自己肯定感が高まり、自信が生まれ、夢が持てるようになります。

また、通信制で週3日を高校で学び、残り2日を大学の授業に出席したり、週3日をアルバイト、例えばゴルフ場でキャディの補助をして収益を得ている子もいます。また、自ら動くことで留学費用を捻出し、オーストラリアに短期留学する生徒や自分で学費を出している生徒も3割近くいて、高校時代からいち早い自立を目指します。

学校と社会、高校と大学、日本とオーストラリア、このハイブリッド(混合型)教育によって、不登校で一度は自信を失った子たちが、視野を広げ、自信を回復し、充実感と達成感の中で自尊感情を徐々に高め、生きることへの意欲を持ち始めてくれるのです。



児童虐待の再発防止をサポート

宮口智恵さん (特非) チャイルド・リソース・センター代表

児童相談所を退職し、虐待の再発防止プログラムを学ぶために大学院への進学を決めていた時に調査研究助成をいただき、カナダで成果をあげている家族再統合プログラムを学ぶことができました。

大学院修了後、2007年にスタートした(特非)チャイルド・リソース・センター(CRC)は、児童虐待の再発防止を目指す活動をしています。

乳児院や児童養護施設に入所中の子どもと親が、2週間に1回、乳児院や児童相談所で会う際、子どもと親それぞれにスタッフがついて、子どもにとって安心な親となるよう、「CRC親子プログラム」を提供し親子を支援しています。

養育モデルを持たない親は子どもにどのように関わればいいのかかわからず、自信も持てません。そのために手厚い特別な支援が必要です。出会う親御さんは子どものことを誰かと話したことがない方が多く、誰かとつながることが大事です。支援を続けるうちに、緊張していて笑顔がなかった子どもは少しずつ表情がやわらかくなり、親も子どもの要求が少しずつわかるようになってきます。

活動を立ち上げる時の専門的な学びへの支援をいただいただけでなく、今も研修への声掛けをしていただいたり、私たちとつながって活動を支えていただいています。



6. ボランティア同士の交流促進

ボランティアグループ同士の交流を深めて

ともしび財団では設立当初からボランティアグループ間の交流を図るよう、努めてきました。1997年～2002年度までは学習と助成金交付を兼ねた助成金交流会を行い、2003年度からは、助成グループ(人)が互いの活動を学び合い、交流することを目的に、ボランティアグループの活動プレゼンテーションによるボランティア交流会を開催してきました。各ボランティアグループの活気あふれるプレゼンテーションは、日ごろのボランティア活動の内容について知る機会にもなり、活動エリアや分野を超えた交流が図られ、新たな学びを生み出すことができました。

2003～2006年度 助成金交流会 (主な内容 ― ボランティアグループによるプレゼンテーション)

2003年から2006年度は8つのボランティアグループが発表を行いました。

2003年度 (284グループ・296名参加)

★は奨励賞を受けたグループ

グループ名	主な活動
ともしびこけし	人形劇
メリーポピンズの会★	市民園芸ネット
ヤンヤンのおうち	障害児交流センター
グループつくし★	心身障がい児のための遊具づくり
うさぎ文庫★	家庭文庫活動
みのり	施設ボランティア
サークルだいご	大型紙芝居、朗読劇
ボランティアサークルハーモニー	ミュージックベル

2004年度 (261グループ・278名参加)

グループ名	主な活動
視覚サービスブックトラック★	弱視の子どもたちへの拡大写本づくり
賀川記念館おやつ作りグループ★	学童保育の子どもたちへの手づくりおやつ
かめのこグループ★	心身障がい児への布製遊具づくり
ミュージカル☆夢☆kirari★	三世代ミュージカルとコミュニティづくり
あそびの縁日	自然素材、リサイクル素材を使ったおもちゃづくり
エコ・グループ武庫川	武庫川流域の自然観察などの環境活動
歌体操 ひな菊会	高齢、障がいがあっても楽しめる歌体操の普及
ベル・グレイセス	ミュージックベルによる演奏活動

助成金交流会(助成金・市民活動交流会)の発表グループ名は当時の名称を記載しています。

2005 年度（254 グループ・272 名参加）

グループ名	主な活動
サンフラワーきよしが丘	地域緑化活動
アンサンブルフレンズ★	被災者への音楽交流活動
KOKORO-NET IN 神戸★	在留外国人とその家族支援
コープデイズ相生ふれあい食事の会★	高齢者への食事会と交流
エコフレンズEMサークル★	EM菌を使った環境活動
兵庫県伴走者協会★	視覚障がい者の伴走や伴歩活動
あそか苑メークボランティア(美)	福祉施設で高齢者へのメーク活動
ハッピーボイス	施設での音楽活動

2006 年度（272 グループ・293 名参加） 発表グループと主な活動

グループ名	主な活動
竹の台地域見守りグループ★	地域防犯活動
朗読の会 神戸草笛	視覚障がい者への朗読ボランティア
あまがさきおとなエコクラブ	親子での自然体験、環境学習
コープボランティアグループささゆり	精神障がい者への生活支援
コープボランティアグループ星の会	高齢者施設での折り紙指導
就学支援サークルひまわり★	中国内陸部の子どもたちへの教育支援
ミュージックボランティア ラルゴの会★	障がい者と共に行う音楽活動
楽遊クラブ銀雅	銭太鼓演奏での施設訪問

奨励賞を受けたグループの中から6つのボランティアグループの活動をご紹介します。

「園芸」を媒介に、支え合い活動

「メリーポピンズの会」

地域のデイサービス施設の周囲がガレキになっていたところに花を植えようと、1996年4月、市に申し入れをしながら近所の有志を集めて庭づくりをスタートさせたのが「メリーポピンズの会」の誕生です。

当初、ツルハシで石を掘り起し、花壇用の石を拾ってくる・・・など大変でしたが、男性ボランティアが力を発揮し、メンバーの中に男性も多く加わるようになりました。川から草をとって堆肥をつくり、種を蒔いて苗を育て、活動資金を得るために育てた花苗を販売する中で、徐々に活動が広がっていきました。今では、当会主催の園芸ボランティアを養成する「たんぽぽ塾」の修了生を中心としたボランティアグループとネットワークを組みながら、宝塚市街地の小中学校等の教育施設や高齢者福祉施設14か所の花壇整備、育苗活動を行っています。そして、オープンガーデンを開催しながら、地域の人たちが集う交流拠点になる試みも行っています。

今年度(2015年度)は国土交通省より「緑の大賞」をいただき、子どもと遊べる庭園を高齢者福祉施設の屋上に造成する予定です。

我々の会はシニア世代が中心ですが、今後は学生など若い方たちとも連携をしながら庭園づくりを行い、つながりを深めていきたいと思っています。



真夏のオープンガーデン



わかくさ保育所キッズガーデン



高司保育所

布の遊具、教材で特別支援学級の子どもたちを支援

「グループつくし」

ハンディキャップのある子どもたちが、楽しく遊びながら訓練できる遊具を手作りしています。子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、布、綿、ウレタンなどを使って、遊具や教材を製作し、主に西宮市立小学校特別支援学級、宝塚市立小学校特別支援学級の子どもたちに届けています。

2015年6月14日で活動は31年目を迎えました。この間、たくさんの人たちとの出会いがありました。1人ひとりの小さな力も皆で支えあうことで、一つの見える力となって生かされてきました。生かされることの喜びも味わいました。これからも、小学校教育の小さな力となって、しっかりと歩み続けていくことを願っています。



手づくり遊具・教材を製作



自宅マンションを開放し、家庭文庫を開室

うさぎ文庫

絵本が好きなお母さんたち8名が、自分が持っていた絵本や子育て仲間から提供してもらった絵本を集め、1998年6月から、月2回、図書の貸出や読み聞かせをしています。18年経った今、明石市立図書館からの団体貸出本(毎月入れ替え300冊)を加え、3000冊近くの本になりました。絵本が多いのですが、文庫本やお母さんが楽しむ料理本なども揃えています。

家庭文庫を開室している間はずっと読み聞かせをしており、子どもたちは目を輝かせながら本の周りに集まってきます。中には読んでほしい本を自分で選び、両脇に抱えている子どもたちも・・・中には0歳2か月から通ってきている子もいます。

本の貸し出しは無制限。2週間で100冊以上、持ち帰られる方もいて、子どもと共に本を楽しんでもらっています。午後のお話会の後はティータイムも設けています。

毎週水曜日には幼稚園や保育園などで出張のお話をしています。また、年に2回、立体の影絵や大型の布製の紙芝居、パネルシアター、ベープサートなどのお楽しみ会も開いて絵本の出会いを楽しんでもらっています。



“次はどんなお話?”とワクワクする子どもたち

弱視の方の読書支援

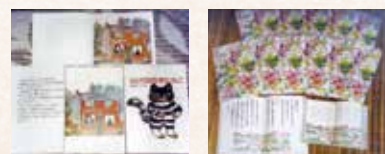
「視覚サービスブックトラック」

弱視の方の読書支援として拡大文字本の作成・寄贈活動をしています。拡大コピーをしたとしても、縦線・横線の太さが違う明朝体では見えない方がおられますし、拡大しても文字の間隔が狭く、上下の文字がくっつき見えないこともあります。そこで入力をし直し、フォントとサイズを変えて見えやすいものへと作り変えています。

メンバーは6名。無理せず、各々ができる範囲内で分業をして、家での作業を中心に活動をしています。

メンバーで選書した本のほか、全国学校図書館協議会の読書感想文コンクール課題図書リストから盲学校の先生に選んでいただいた本をもとに作成します。作家や関係者に著作権使用許可の申請をする中で、活動を知っていただき、ブログやホームページで活動紹介をしていただいたこともあります。先生と相談をしながら、基本の大ききで作った本は学校図書館に寄贈をしています。もちろん個別対応を求められれば、応じています。

私たちが目指しているのは「選べる読書」。多くの本から自分の好きなものを選んでいただくため、これからも様々なジャンルから選書して拡大文字本を作っていきたいと思っています。



2007～2008年度 助成金・市民活動交流会

(主な内容グループのプレゼンテーションと調査研究助成の成果報告)

2007～2008年度の助成金・市民活動交流会では、5つのボランティアグループによるプレゼンテーションに加え、調査研究助成を受けた人の成果報告も行いました。今日の課題について学び合い、見過ごしてはいけない社会課題があるという気づきを得る機会になりました。



2007 年度 (268 グループ・320 名参加)

[ボランティアグループ活動報告]

グループ名	主な活動
プラス1 (ONE) ネット	自主企画による海外ボランティア
明石不登校から考える会	不登校をテーマとした当事者の親による活動とネットワークづくり
コープこうべ・ともしびこぼとグループ	手で見る絵本の製作と普及
野楽の塾	青少年の自然体験活動
尼崎のお手玉の会	伝承遊びを通じた地域づくり

[調査研究報告]

報告者	テーマ
宮口 智恵	困難を抱える親支援をすすめるために
高尾 千秋	地域のボランティア養成
寺村 ゆかの	「あーち」と産科施設をつなぐ

2008 年度 (238 グループ・259 名参加)

[ボランティアグループ活動報告]

グループ名	主な活動
ボランティアサークルこすもす	編み物の収益による寄付活動
阪神子どもの虐待防止ネットワークほっと	虐待や子育て不安に対する電話相談
ぱりぱりふりーKOBÉ	知的障がい児をアートで応援
兵庫盲ろう者友の会	盲ろう者の生活全般にわたる支援活動
はまなす点訳の会	点訳ボランティア
コミュニティひばり環境部会	自然環境保全

[調査研究報告]

報告者	テーマ
北村 広美	在日外国人の保健医療サポート
金治 宏	NPOの存続可能性の構築
山本 晃輔	渡日外国人子弟の支援
岡澤 潤次	高齢者の活躍とシルバー人材の活用
徳永 桂子	中学校3年生への性教育実践

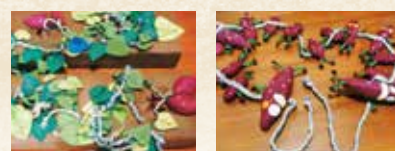
特別支援学校の子どもたちへのおもちゃづくり

「かめのこグループ」

1982年4月から特別支援学校などに通う子どもたちの情操教育や機能訓練に役立つおもちゃ作りをしています。安全とぬくもりを重視し、質感や色彩にもこだわって製作をしています。子どもたちが楽しみながら学習してくれるよう、興味のあることを考え、機能訓練を取り入れながら、できるだけ本物に近づけ、音も入れて立体的に仕上げます。

自分はひとつのパーツの担当でも、集結して大きな作品が完成すると、充実感を感じます。また、仲間と共に作品づくりをすることで、無理のない社会参加ができています。お互いに刺激し合い楽しんでいるからこそ、30年以上活動を続けることができたように思います。

子どもが作品にほおずりをして体いっぱい喜びを表現してくれたとき、私たちの方が感謝するほど感動、幸せを感じます。



心のこもった食事でなごやかな時間を過ごしてもらいたい

「コープこうべデイズ相生ふれあい食事会」

コープこうべデイズ相生の組合員集会室にて毎月1回、65歳以上の高齢者を対象に、食事を提供しています。なかなか外出の機会が少ない高齢者とボランティアが一同に集まり、バランスのとれた食事をいただいた後、ふれあいタイムで楽しいひとときを過ごしていただいています。高齢者同士が仲良くなったり、ボランティアスタッフと外で会ってもいろいろなことを話すようになり、ふれあいの輪がどんどん広がっています。

毎月、楽しみに待ち望んでくださっている方も多く、おしゃれをして来てくださっています。これからますますふれあい食事会に来たいと思っていただけるよう、歌、ゲーム、体操、踊り、カラオケ、手作り作品等のふれあいタイムを企画し、笑顔で進めていきたいと思っています。



2010年～2013年度 市民活動交流会 (主な内容 ― 講演会とグループ交流)

新型インフルエンザで中止となった2009年度をはさみ、2010年度からは、会場を、神戸市東灘区のコープこうべ生活文化センターに移し、助成を受けたボランティアグループがすべて集まることができるスタイルに変更しました。

2010年～2013年度は、グループのプレゼンテーションを行うスタイルから、ボランティアに関する講演に加えて4～8名のテーブルに分かれてグループごとに交流するスタイルに変え、市民活動交流会を実施してきました。

他のグループからの活動内容を聞きつつ、自らのグループの活動報告を行うことで、それぞれのグループ活動の歴史やミッションを確認する場にもなりました。そして、活動上の悩みや夢などを語り合い、交流を深めていくことで、自らの活動を継続していくことへの意欲につながる場となりました。毎年、定期的な場として情報交換を行っていくことで、交流会への参加を楽しみにしているグループの方も増えました。

●2010年度 助成金・市民活動交流会



「いつも笑顔で仲間づくり～社会や暮らしの課題と
うまく関わっていますか?～」

講師:栗木剛氏(Mottoひょうご事務局長)

●2011年度 助成金・市民活動交流会



「ボランティアが根付く地域めざし～ともしび
財団の個性いかして」

講師:山口一史氏(特活)ひょうご・まち・くらし研究所常務理事

●2012年度 市民活動交流会



「寄り添い共感できるボランティアをめざして～
必要とされる活動であり続けるために」

講師:千田明美氏(元コープくらしの助け合いの会 本部事務局)

●2013年度 市民活動交流会



「地域にかかわることのおもしろさときっかけ
づくり」

講師:松原永季氏(スタジオ・カタリスト代表)

2014年度 市民活動交流会 (主な内容 ― 基調講演とパネルディスカッション)

●2014年度 市民活動交流会



講師:上野千鶴子氏(認定NPO法人ウィメンズアクション
ネットワーク(WAN)理事長)

2014年度は、単身化、高齢化が急速に進んで「無縁社会」が社会問題となる中、「おひとりさま」となっても自分らしく生きていける地域づくりを考え、今後の「居場所づくり」支援の契機とすることを目的に開催をしました。

川中大輔さん(シチズンシップ共育企画代表)をファシリテータに、上野千鶴子さん(認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長)、中田智恵海さん((特活)ひょうごセルフヘルプ支援センター代表)、中村保佑さん(東灘こどもカフェ代表)のパネルディスカッションを行ったほか、各グループの交流を促進するために、グループ紹介カードの展示・配布を行いました。



2015年度 市民活動交流会 (主な内容 ― グループ交流)

●2015年度 市民活動交流会



ファシリテータ:河合将生氏(NPO組織基盤強化
コンサルタント「office musubime」代表)

2015年度の市民活動交流会は、初めて委員会形式で企画しました。手を挙げて企画委員になってくれた代表者の皆さんと討議しながら、交流会当日のプログラムを決定しました。

その中で、交流会の目的について、以下の2つとすることを確認しました。

①ともしび財団のミッション、事業について理解を深めていただき、ボランティア活動の社会的役割や意義について、あらためて考え合う機会とする

②ボランティアグループが一堂に会し交流することで、多くのグループの活動を知り、今後の活動の参考にしたり、お互いに連携・ネットワークするきっかけづくりとする。

グループ同士の交流では、活動をしていて良かったこと・嬉しかったこと、グループニュースを、エピソードを交えながら話したり、具体的に自分たちの活動の強みを伝えていただきました。

市民活動交流会の開催により、ボランティアグループ同士が地域や分野を超えて交流をして関係を深め合い、それぞれのボランティア活動の意義を確認する場にもなっています。また、活動を続けること・広げることへのヒントを得たり、グループ同士が連携・協力をしながら活動を進めていくことへのきっかけづくりにつながっています。

7. 先駆的分野のボランティア活動への支援

阪神・淡路大震災以降、社会のボランティアに対する意識が大きく変化し、ボランティアは市民活動として定着し、地域社会を支え、形成する上で不可欠な活動と考えられるようになってきました。

2006年12月には「第1次中期計画」を策定し、ともしび財団の設立後10年間の活動の検証を行い、2007年以降の事業目標として以下の4つの柱を設定しました。

- (1)誰もが安心して暮らせる地域のセーフティネットづくり
- (2)グループ相互の交流や学び合いの場を提供するコーディネート機能の拡充
- (3)震災体験の継承とボランティアな活動の意義を発信
- (4)地域の福祉を充実させるための調査研究活動やそこから導き出されたことを提言

その中で、ともしび財団設立以降、支援を行ってきた地道で息の長い活動に光をあてるとともに、時代の変化に対応した先駆的分野を積極的に開拓し支援していくことが盛り込まれました。

視覚障がい者をスポーツで支える

「ひょうご伴走歩協会」

ひょうご伴走歩協会は、1997年5月、視覚障がい者のウォーキングやジョギングを楽しみたいという思いに応え、伴走者・伴歩者のボランティア団体「兵庫県伴走者協会」として発足。2013年4月に名称を「ひょうご伴走歩協会」に変更しました。

練習会では、伴走者・伴歩者がペアとなり、伴走ひもを片手ずつ持って離れないように行きます。練習会場は、姫路・神戸・西宮・尼崎・西脇・三木・小野・たつのの8か所。すべて屋外で行っており、安全に気をつけながら視覚障がい者の皆さんにウォーキングやジョギングを楽しんでもらっています。

視覚障がいといってもまったく見えない方もいらっしゃるし、少し見える方でも各々見え方は違います。そのため、事前に話をして合図を決めたり、しっかり声掛けをしています。途中できれいな景色が出てくれば、状況も交えながら話をして伴走・伴歩しています。

コミュニケーションをとって伴走するので、お互いの心が通じ合う喜びもありますし、練習会に参加することで、ボランティア自身の健康にもプラスになり、一緒に大会に出たりして達成感も味わえます。外出する機会が少ない視覚障がい者も多く、活動の場がふれあいの場にもなっています。



留学生・外国人研究者とその家族を支援

「KOKORO-NET in 神戸」

1996年11月、衣食住、考え方、言葉など、文化の異なる環境で生活する留学生・外国人研究者とその家族を支援し、相互理解を図ることを目的として「KOKORO-NET in 神戸」を設立。神戸市内3か所で開催している「ココロカフェ」（日本文化の紹介や交流のプログラム）と日本語講座（神戸大学内）、病院や区役所の付き添いなど日常生活のサポートも行っています。

月1度のココロカフェでは茶道、生け花、着物体験といった伝統文化の紹介や日本の家庭料理、ハイキングなど季節に合わせてプログラムを行っています。

留学生や研究者の中には家族と一緒に来日する人も大勢います。留学生本人は日本語を学ぶ機会がありますが、家族は日本語が全く分からず日常生活に困る方も多いため、ココロネットの日本語講座は主に留学生・外国人研究者の家族を対象にしています。

日本の文化を楽しみながら日本の生活にも慣れて親しみをもって頂ければ、また交流を通して互いの理解も深めてゆければ、と願いつつ活動を続けております。



お弁当づくりプログラム



着物体験プログラム

医療現場、外国人支援の現場に医療通訳のできる人材を育成

「医療通訳研究会 MEDINT」

日本に暮らす「外国人」や「ろう者」が医療機関を安心して受診するためには、コミュニケーションの橋渡しをする医療通訳者が必要です。また医療現場で通訳するには通訳者に医療の知識や通訳技術も必要です。そこで病院や保健所等にいられた患者さんの医療通訳を行う人たちのスキルアップを図るために、2002年よりグループを立ち上げ、研修などを行っています。

現在活動している会員は約100名。医療通訳者の他、看護師、薬剤師、心理士など医療関係者も半数を占めています。女性が多いのですが、最近はリタイアされた、海外経験豊富な男性も増えてきました。例えば前立腺など男性特有の病気もあるので、外国語を話せることに加えて人生経験もある男性は医療現場からも歓迎されています。

言語の研修会は年4回、予防接種や認知症、感染症、精神疾患など様々な医療テーマで、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、タイ語という各分科会に分かれて行っています。そのほかにも通訳技術や社会保障、医療に関する勉強会も開催しています。

国や地域によって病院のシステムや保険・診療費用、病識の違いがあります。それゆえ、医療者と外国人患者のコミュニケーションのずれを調整することも医療通訳の役割です。海外で病気にかかった経験のある方や子育ての経験のある方たち、日本語のできる外国人、いろんな方にぜひ活躍していただきたいと思っています。



医療タイ語分科会



医療スペイン語分科会

第1次中期計画の中では、当事者同士が自発的に集まりお互いをエンパワーメントしていくセルフヘルプグループへの支援を始めることも示されました。当事者同志の支え合いがセルフヘルプグループの活動です。

声を取り戻すための教室を開催

「兵庫県喉摘障害者福祉協会 神鈴会」

喉頭がんなどで咽頭摘出手術を受け、声帯を失うという同じ経験を抱えた方に、支援を続けている「兵庫県喉摘障害者福祉協会 神鈴会」。昭和44年に会が発足し、声を取り戻すための教室を開いています。

しゃべれないということで家に閉じこもったり、社会参加しないということにつながる可能性があります。家族の中でさえ疎外感を味わうことも。そこで神鈴会では、日常会話に必要な言葉を取り戻すために手術をした病院の会議室や応接室で寄り集まり、発声訓練をしています。

兵庫県内で喉頭がんによって声帯を摘出している方は2,000名、神鈴会のメンバーは300名、そのうち声が出て指導能力のある方(発声指導員)が22名です。兵庫県下では活動場所が10か所あり、喉頭摘出手術を行う病院で場所を借り、発声指導員がそこに出張して指導しています。

声帯の代わりとなる第二の声の獲得には、比較的容易に声が出て喋れる電動式人工喉頭発声や、習得に時間はかかるけれども肉声に近く自然に喋れる食道発声等があり、本人の希望・体調、手術の状態に応じて発声方法を選択しています。声は出てもすぐには会話につながらないので繰り返し練習をし、簡単な会話から日常会話へとレベルアップしています。また、気管孔呼吸に対する季節的日常管理、代用音声で日ごろの悩みをお互いに話し合ったり、健康の維持のための生活の知恵等の情報交換の場として活動したり、発声指導員向け発声指導向上のための研修会も開催しています。



さらにともしび財団は、子どもの発達における課題や認知症など高齢化にともなう課題は、今の時代を映し出す問題提起であり、社会発信が必要であるという認識に立ち、積極的な支援に取り組むことになりました。

人材ネットワークで子どもたちを支援

「チャイルドサポートバンク」

チャイルドサポートバンクは、発達がゆっくりしている、デコボコしている子どもたちとその家族を支援する団体です。設立は2010年4月。民間学童保育所で出会った発達障がいを持つ子ども、母子関係が不安定になった子どもたちとその家族のサポートをキッカケにグループを結成し、活動をスタートしました。

最初に取り組んだのは、「情報」の提供でした。「子育てに悩んだらあなたはどこに相談しますか?」をキーワードに、敷居の低い「相談機関」と信頼できる「医療機関」、そして手厚く支援してくれる「サポート施設」を結び、子どもを支える人材ネットワークを作る活動を、コミュニティラジオの番組を活用して行いました。タイトルは「聴いてほしいの子ども気持ち」。聞けそうで聞けない不安や悩みに対する様々な情報を、行政や大学、病院など子どもたちに関わる専門家約90団体の協力で発信。幅広く多彩な内容となりました。

その繋がり、子育てに悩む保護者の勉強会や講座、子どもたちのワークショップ、学習サポート活動へと発展しました。確かな情報とマンパワー。チャイルドサポートバンクは、子どもたちを支える多くの方々との出会いを通じて、子育てに悩む人たちをこれからもサポートし続けます。



2013年3月、ともしび財団が作成した「第2次中期計画報告書」では、ともしび財団の組織理念の一つとして、子どもから高齢者に至るまで、あらゆる人々が一人ひとり尊重され、明日の暮らしに希望を持てるような地域連帯を強め、助け合いささえ合う「協同の基盤づくり」を目指すことを位置付けています。

近年、特に都市部では地域における近隣同士の関係が希薄化し、ひとり暮らし世帯で日常的に家族からの支援を得られない高齢者が増加しています。地域の支え合いの機能が低下することによって、介護や子育て、防犯等の面でも不安を感じる人が増えています。誰もが安心して住み慣れた地域で暮らすためには、地域活動、ボランティア活動などにより多くの人たちが関心を寄せていくことが求められます。

そのような中、住民同士が支え合い・助け合いのまちづくりを始めている新たな取り組みも出てきています。

誰もが住みたくなるまちづくり

「ラ・ビスタささえ愛ネット」

2900世帯・8000人が暮らす「ラ・ビスタ」は宝塚駅から北の山側に広がったニュータウン。住民同士の支え合い活動を通じ、ずっと住み続けたい、ゆるやかなつながりのある温かいまちづくりを目指して活動を行っています。

2011年5月の自治会総会にて「もっと福祉の充実を図ってほしい」という話が出たことがきっかけとなり、地域包括や社協に相談しながら、住み続けたいまちにするための勉強会を開始しました。そして、地域の状況を知るために全戸配布のアンケートをとったところ、「手伝ってほしいこと、ボランティアでできること」に168名、「手伝えること」に119名が回答を寄せました。それが地域の中にさまざまな経験、特技、趣味を持っている人の発掘になり、まちづくりに活かすことにもつながっています。

2013年7月の総会を経て「ラ・ビスタ ささえ愛ねっと」を設立。ボランティアとして約100名が登録をし、ささえ愛ネット専用の携帯電話にかかってきた困りごとを、コーディネーターが登録者につないでいます。例えば、転んで犬の散歩に行けなくなったという相談には、7名の登録ボランティアにつなぎ、月曜～日曜まで毎日違う人が散歩を手伝いました。パソコンの相談にのったり、小学校の参観日に学校の空き教室で未就学児の保育や児童預かりをしたり、花壇の管理や早朝のラジオ体操等も行っています。

地域の人たちが気軽に立ち寄れる「ラ・ビスタよりあい広場」も2014年1月よりオープン。月～金13時～16時まで開かれていて、地域住民の出会いの場となっています。



地域のお茶の間「ラ・ビスタよりあい広場」



壁紙貼り等のリフォームもみんなで...



地域内でのつながりを創出するために、地域の誰もが気軽に立ち寄っておしゃべりができる「居場所づくり」をしていこうという動きも各地で広がっています。お茶を飲んだりしながらおしゃべりをするだけでなく、安否確認や困りごとの相談、絵画や手芸などの趣味の活動、スポーツなどの健康づくりを行うなど、居場所の内容は様々です。

居場所の形態も多種多様で、公共施設や集会室などで実施をされているサロンもあれば、空き店舗を改修したり、自宅の一部を開放したりしているものもあります。主体的に地域の人々が居場所の運営にも参画をすることによって、人と人とのふれあいを大切にしたコミュニティ活動が推進され、地域や世代を超えた出会いが生まれています。

多世代が地域を超えて交流する”まちなかのリビング”

「東灘こどもカフェ」

東灘こどもカフェは2011年4月にオープン。代表の中村保佑さんは20年ほどの単身赴任を終えて神戸へ戻った時に、「自分の居場所をつくろう」と、同じ思いをもった人たちと共に甲南商店街近くの一室を借りてスタートしました。開設から4年半で、約18,000人を超える人たちが集っています。

東灘こどもカフェでは主に3つの活動を行っています。

1つは居場所づくりの活動です。だれもが気軽にリビングとして使えるような居場所ということで、図書室も設けて20畳ほどの「こもれど」で多世代交流をしています。毎日、10時～18時まで開いており、食事づくりも行っています。月・水・土はお弁当をつくるので、20名ほどのお弁当隊がいます。料金は1食500円(会員は350円)で、出入り自由、予約なしで来ていただいています。また、玄関前には地域の皆さんから無料提供していただいたものをバザー商品として10円～300円程度で販売しています。

設立当初は子どもを対象としていたのですが、子どもは受験などでだんだん忙しくなり、今よく来ているのは昔の子どもたちです。

2つ目は講座、イベントの開催です。地元の人たちが特技を生かして講師となり、子ども向け、大人向け、お年寄り向けの講座をしています。ちょっとした美しさ講座、熟年ランチコンパ、こどものおやつ寺子屋、クリスマス会やハローウィンパーティ等という楽しいネーミングで年間約150回開催しています。

3つ目は何でもお手伝いチームとして、一人暮らし高齢者の掃除や庭木の剪定などの生活サポートを行っています。

2015年2月にはメンバーが東灘こどもカフェの第2拠点として淡路島に「こもれど淡路」を開設しました。

現在、会員が440名。みんなが気軽に集える場によって地域の新たなつながりが広がっています。



2015年度、新たな住民同士のつながりを生み出し、助け合い、支え合う活動をこれまで以上に推進していくことを目指して、ともしび財団では「地域の居場所の立ち上げ助成」を行うことになりました。居場所の対象者は限定せず、地域のつながりの回復を目指して継続的に活動を行っていくグループに対して、部屋の改装費や看板作成など、居場所開設のための資金提供を行いました。

8. 様々な組織との協働によるボランティア活動の推進

ともしび財団はボランティア活動をより活発に推進していくために、コープこうべや社会福祉協議会、中間支援組織等のNPOと連携をしながら、事業を遂行してきました。

協働で講座やイベントを開催

ともしび財団の設立直後から実施してきたボランティアコーディネーターの育成研修は、2001年以降、コープこうべや神戸市社協、兵庫県社協(2002年よりひょうごボランタリープラザ)、日本ボランティアコーディネータ協会(JVCA)などと連携をとりながら、2010年度まで開催してきました。

さらに2002年度からは、コープこうべの各地区コープ福祉ボランティアセンター(当時)と連携し、地域に根ざした活動が盛んになるよう、研修事業を組み立ててきました。

2015年度以降は、ともしび財団が講座のプログラムや資金の提供を行い、コープこうべの地区活動本部が主催して講座を行い、終了後には活動コーディネートを担うなど、それぞれの機能を分担しながら、ボランティアの推進に取り組んでいます。

2001年1月から始まった「ひょうごボランタリースクエア21(事務局=兵庫県社会福祉協議会)」には、実行委員として参加しました。この「ひょうごボランタリースクエア21」は、兵庫県内のボランタリー活動団体の交流を促進することを目的として開催され、県内のボランティア・市民団体、NPO、行政、企業などと共に公開審査ですぐれたボランティア活動を表彰し、資金支援を行うというアワードを中心としたイベントです。2009年まで開催され、ともしび財団と他の中間支援団体とのネットワークが生まれました。

また2007年からは(特活)ひょうごセルフヘルプ支援センターと連携し、支援の隙間になりがちだった、課題を抱えた人どうしが支えあって、力をつけあう「セルフヘルプグループ」の活動を知らせる「セルフヘルプセミナー」を、2014年まで年1回、定期的を実施してきました。2015年以降は、セルフヘルプグループの活動を多くの方に知ってもらうための広報協力やグループへの活動助成を行っています。

(特)ひょうごセルフヘルプ支援センターの意義

本年、(特)ひょうごセルフヘルプ支援センターは創立15周年を迎え、その記念事業を開催いたしました。

身体やこころの病気や障害を抱える人たち、高齢者や事故や病気の後遺症を抱える人の介護者家族、性的少数者、アルコールや薬物の依存症者、DV被害者、精子提供で生まれた人たち、不登校やひきこもりに関わる家族や関係者などなど極めて多様な課題に向き合う27のグループから活動内容やその目的などについて発表して頂きました。

皆さん「生きることにこんなにも様々な、しんどさがあるんだ」「しんどさを抱えているのは自分だけではなかった」「他のグループでも共通の運営上の課題を抱えている」と知って一様に嬉しく勇気づけられる一方で、「問題へのそんな向き合い方があるのか」「このしんどさは自分自身の問題だろうか、社会の側にあるのだろうか」と深く考える場ともなりました。また、逆に「自分がどれだけ幸せなのかが分かった」などといった感想が寄せられました。これはしんどさを抱える人への理解の最初の一步です。つまりボランティア活動の意義でもあります。

治療法がない、公的な社会サービスが整備されていない、タブー視されて公表することさえ、はばかれる生活上の困難などは社会福祉や健康の専門職者では今直ぐに対応できることではありません。

しかし、日々そうした課題を抱えて生きる人たちにとっては「今」の問題です。明日への変革を見つめて「今」に対峙する、そうした力を一人ひとりが獲得する。そして地域社会の人々がそれを体感しつつ理解する。そんな一人ひとりの自己実現と理解し合える社会の実現を目指して日々、焦らず、止めず、地域に根差して活動しています。



(特)ひょうごセルフヘルプ支援センター
代表 中田智恵海

広報も協働で実施

毎年、秋に取り組んでいる「コープともしびボランティア募金」のポスターやチラシも、2008年から2年にわたり、神戸芸術工科大学と協働制作をしました。初年度は、学生たちの候補デザインを生かしての募金ポスター展を、コープこうべ生活文化センターのロビーで開催しました。

2010年度は、神戸市垂水区にある、年齢や障がいの有無に関係なく楽しみながら学べる絵の教室「クルレ」と協働制作しました。つながって生きていきたいという言葉が印象的なポスターでした。



「コープともしびボランティア募金」ポスター展

多様な人たちとの協働により、ともしび財団のミッションの実現へ

NPO寄付システム

ともしび財団は、「賛助会費」「寄付」「募金」を財源として運営しています。忙しくてボランティア活動をする時間がない、という方でも、賛助会費や寄付というかたちで、ボランティアへの支援ができます。2001年10月からは、賛助会費や寄付をコープ店舗のサービスコーナーで現金でお預かりする方法のほか、口座振替でも受け付けることができるようになりました。これは1か月100円から、という少額からの寄付ができるもので、「NPO寄付システム」という、近畿ろうきんとの連携で生まれた新しいしくみです。

運営委員会を設置

2007年2月1日には、ともしび財団のミッションを実現するため、財団が行う事業活動への助言、情報収集や提供、事業計画立案への提案などをいただくための運営委員会を設置しました。

検討するテーマに応じて、その専門の分野となる人たちを含め、概ね5～10名の運営委員がともしび財団専務理事より委嘱されました。運営委員は市民活動を行っている外部有識者を中心として構成され、年4回程度、運営委員会を開催しています。ボランティア活動助成の申請書の内容に至るまで、中身の濃い議論を積み重ねながら、助成のしくみの見直しなども随時、行っています。

さらに課題の必要性に応じて、助成プランづくりや助成事業の評価手法、広報、支え手と活動をつなぐ分野などの部会を開催し、ボランティア活動支援の効果的な取り組みの枠組みづくりの検討を行っています。



2015年 運営委員会

応援団の応援団

阪神・淡路大震災では、多くのものが失われましたが、新たに生まれたものもあります。

そのひとつが、「市民力」です。打撃を受けた被災地で、大勢の人が復興支援のために協働しました。「ボランティア」という言葉も、一気に誰もが知っている言葉として確立し、震災が起こった1995年は、後に「ボランティア元年」と呼ばれるようになりました。

コープともしびボランティア振興財団(以下財団)は、市民のボランティア活動を応援する組織として、コープこうべに寄せられた善意を基に設立されました。

それから20年、財団は地域での草の根活動を継続しているグループ、移り行く社会の課題に対応して、活動を創出したグループ、地域でボランティアコーディネーションを活かす研究をしている個人を応援してきました。

応援の形は、助成するだけではなく、研修・相談など幅広い事業を、女性ばかりの事務局スタッフわずか5人で行っています。その後方支援をしているのが、運営委員会です。いわば応援団の応援団と言えるでしょうか。

社会課題は複雑化し、かつ増えていくと考えられる今後は、安心して住み続けることのできる地域づくりは、他の誰でもない自分自身が創っていくものとなるでしょう。

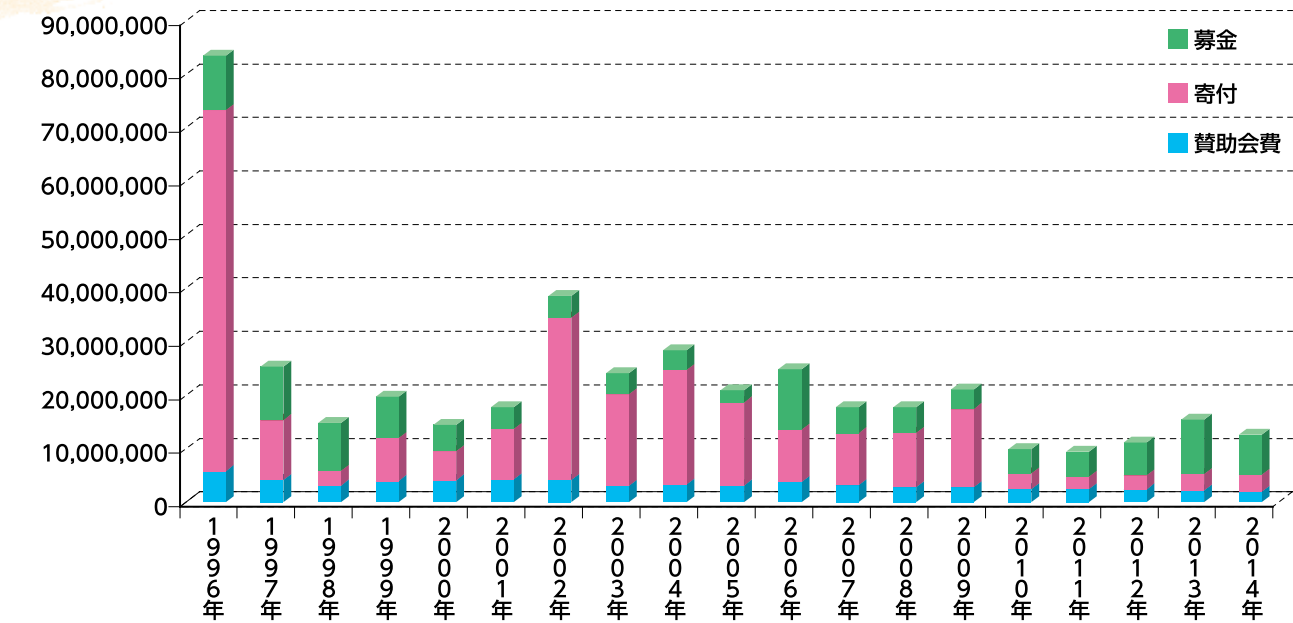
現場の課題をしっかり把握して、的確な応援を継続するために、私たち運営委員会も一緒に汗を流す応援団でありたいと思っています。



コープともしびボランティア振興財団
運営委員会 委員長
海士 美雪

9. 賛助会費・寄付・募金

ともしび財団の活動は、地域の人たちからの賛助会費や寄付・募金によって支えられています。ともしび財団設立から2015年3月末までにいただいた寄付や賛助会費の総額は4億27,77万6,546円になりました。



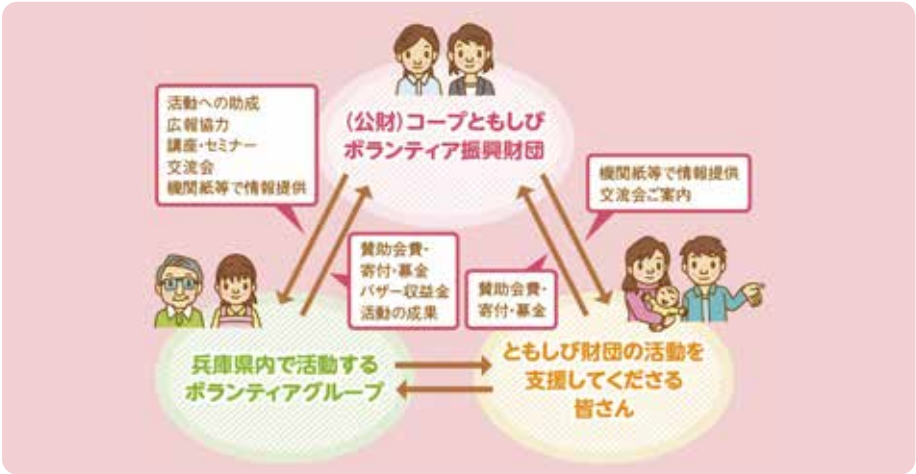
創立以来の、賛助会費・寄付・募金について

年度	賛助会費	寄 付	募 金
1996	5,829,501	67,489,387	10,213,606
1997	4,188,000	11,190,969	9,978,169
1998	3,125,000	2,721,365	9,006,817
1999	3,986,000	7,970,606	7,788,130
2000	4,115,000	5,478,111	4,836,050
2001	4,331,000	9,343,284	4,081,429
2002	4,165,000	30,351,406	4,074,905
2003	3,022,000	17,146,070	3,926,948
2004	3,291,000	21,497,640	3,643,499
2005	3,136,000	15,540,143	2,238,453
2006	3,806,000	9,752,032	11,274,380
2007	3,194,000	9,726,756	4,884,921
2008	2,860,000	10,090,984	4,798,684
2009	2,775,000	14,685,016	3,591,848
2010	2,453,000	2,973,833	4,516,594
2011	2,456,000	2,380,025	4,600,660
2012	2,391,000	2,672,792	6,106,023
2013	2,244,000	3,053,693	10,163,775
2014	1,949,000	3,247,084	7,423,958
計	63,316,501	247,311,196	117,148,849

善意の支援金と活動の循環

ともしび財団に寄せられた寄付金・賛助会費は、兵庫県内で活動するボランティアグループへの助成金として、また、ボランティアを育成する講座・セミナーやボランティア同士をつなぐ交流会の開催費として、さらにはボランティア活動を広めていく広報費として活用しています。寄付金・賛助会費をいただいた方には機関誌などでともしび財団よりボランティア活動について情報提供を行っています。

ボランティアとして支える側、支えられる側は固定的ではありません。賛助会費や寄付をしている人が空いた時間を利用してボランティア活動を行うこともありますし、ボランティアグループもバザーなどの売上によって寄付をすることもあります。お互いが助け合い、支え合っていくために、各々ができるボランティアによって協力し、より厚みのある活動を生み出しています。



ともしび財団設立以降、定期的にバザーを開催し、その収益を財団に寄付し続けたボランティアグループもあります。

15年間毎月17日に開催するバザー収益による寄付でボランティア活動を支援

「コープボランティアグループいちんな市」

阪神・淡路大震災直後、近隣の組合員から支援品が集まり、当時の宝塚コープ福祉・ボランティアセンター（現在は第1地区活動本部）が、コープ宝塚の廊下で被災者のためにバザーを開始。それを引き継ぎ、「コープボランティアグループいちんな市」として活動が始まりました。

不用品の提供をチラシで呼びかけ、第1地区本部（当時）に集まってきたものを毎月17日にバザー品として提供。バザー当日は朝8時半にはメンバーが集合し、品物の点検・陳列などの準備をして、10時に開始。価格は原則すべて100円で、活動を縮小する2010年3月17日まで15年間にわたり、毎月17日にバザーを開催。その収益をともしび財団に寄付させていただきました。

毎回10時には並んで待ってくださる組合員がいたり、中にはわざわざタクシーで来られる老夫婦などいて、多くの方が会場で再会できることを楽しみにされていました。ふだん着ることがない洋服にチャレンジし飽きたらバザーに出す、かばんやタペストリーに変身してバザーに戻ってくるなど、組合員と共に活動してきたという思いです。東日本大震災以降は被災地の学校にベルマークを送るグループとして活動しています。



また、グループに所属している人たちの技能を生かして手作り小物をつくり、ボランティア自身がバザーなどを行い、その収益を財団に寄付しているグループもあります。

手編み作品の展示・販売によってボランティア活動を支援

「ボランティアサークルこすもす」

1994年5月、手編みが好きなメンバーが集まり、グループを結成、同年10月、組合員まつりでつくりためておいたセーターやベストなどを展示販売したところ、参加者から非常に喜ばれ、結婚や出産祝いで大切に保管されていた毛糸の寄付がたくさん寄せられました。

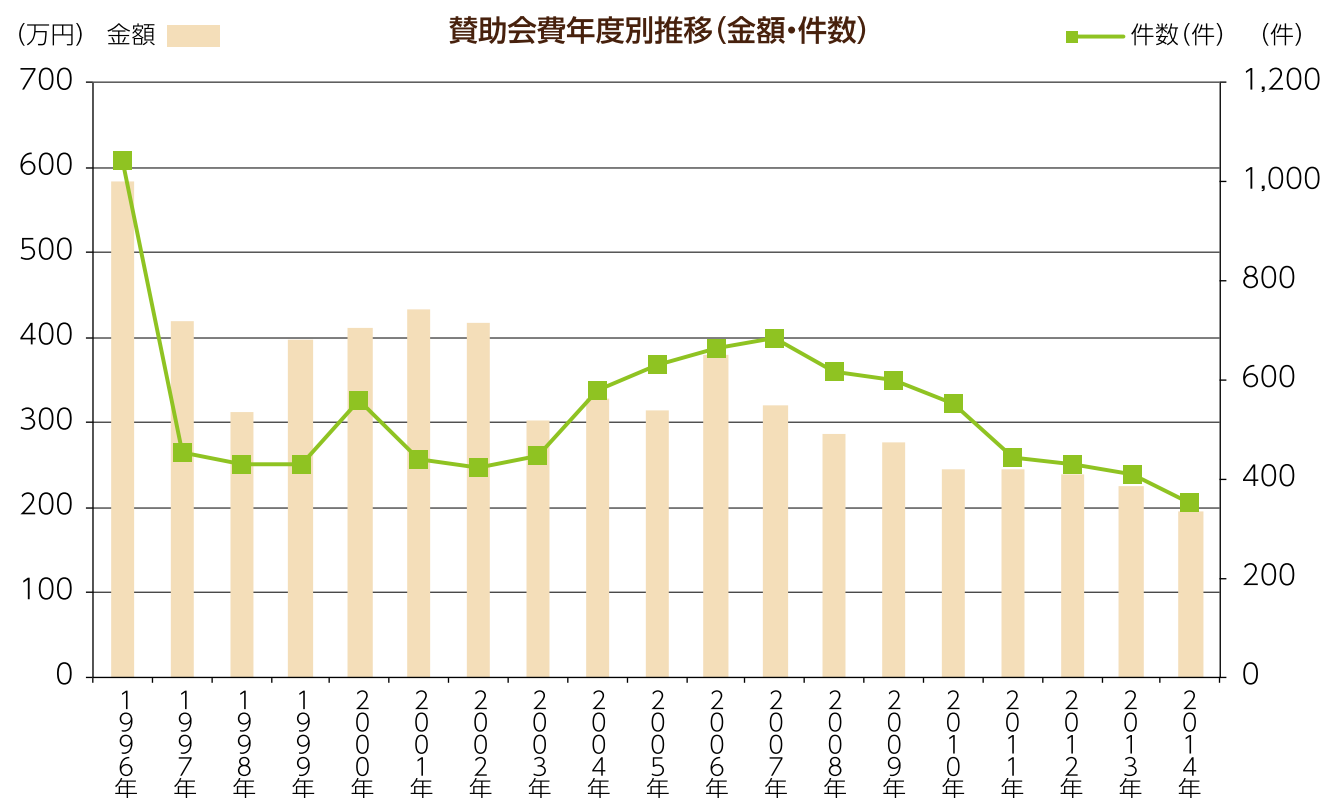
集会室で顔を合わせて行う活動は月1回ですが、家に毛糸を持ち帰り、最新の雑誌等を研究しながら、セーター、ベスト、帽子、座布団、アクリルたわしなどを作っています。コープ西鈴蘭台の組合員まつりとコープサークル発表会で毎年展示・販売をして、その収益はともしび財団に寄付しています。



賛助会費

ともしび財団の趣旨に賛同し、毎年、定期的に資金支援をしているのが「賛助会員」です。

ともしび財団設立以来、のべ10,189名(2015年3月末現在)が、賛助会員となってボランティア活動を資金面で支えています。設立以来、毎年支援している人、毎年ではないけれど今年は・・・という人、ボランティア活動を応援する思いはさまざまですが、多くの皆さんの思いによって県内のボランティア活動は支えられています。



寄付

ボランティアグループや地域の人たちからの寄付

ともしび財団の趣旨に賛同しているボランティアグループをはじめ、企業などの法人、広く地域の皆様からの寄付を受けています。

コープこうべの夕食サポート「まいくる」による寄付

2011年1月にスタートしたコープこうべの夕食サポート「まいくる」。毎日の安心できるくらしづくりをサポートするコープこうべの支援事業で、栄養バランスを考えた弁当を夕食として届けています。ひとり暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯だけでなく、共働き世帯や子育て世帯の利用もあります。この「まいくる」は1食あたり0.5円を社会貢献活動に還元するしくみとなっており、地域の暮らしを支え豊かにするボランティア活動への支援にと、ともしび財団に寄付されています。



コープ委員会による寄付

コープこうべには現在、兵庫県下で110のコープ委員会(2015年度4月現在)があります。多くのコープ委員会が秋に行われる組合員まつりでの収益を寄付しています。中にはともしび財団設立以来、毎年寄付をしているコープ委員会もあります。

募金

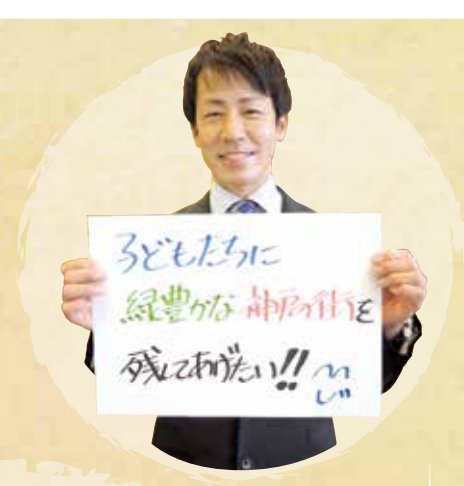
毎年秋(10月頃)に、コープこうべ全店舗、宅配事業で実施している「コープともしびボランティア募金」を含む募金の総額は、20年間で1億1,714万8,849円にのぼります。

また2012年度以降は、コープこうべ宅配事業の利用によって貯まる「めーむポイント(100ポイント=100円)」で、ともしび財団に募金ができるようになりました。商品注文書に6ケタの数字と口数を記入することで手軽に社会貢献できるため、2012年度から2014年度の3年間で、計1,141万7,700円の募金が寄せられています。

税制上の優遇措置について

2012年4月1日から、ともしび財団は兵庫県の認定を受け、「公益財団法人コープともしびボランティア振興財団」として再スタートしました。

財団法人から公益財団法人への移行によって、賛助会費や寄付を年間2000円以上納めた場合、税制上の優遇措置が受けられることになりました。



みんなで 創りたい、
私たちの地域

ボランティアグループと、その活動を支えている方々から、今後取り組んでいきたい地域について、メッセージを寄せていただきました。



皆さまと共に、未来創造

いつもご支援いただきありがとうございます。
みなさまと一緒に、今後も地域の課題解決に向けて精一杯取り組んでまいります。

by (公財)コープとしむボランティア振興財団事務局



資料1 設立趣意書

財団法人コープともしびボランティア振興財団設立趣意書

大正10年に、社会運動家である賀川豊彦氏の指導のもと、お互いが心から信頼し合い、助け合う「愛と協同」を活動の理念として、「神戸」及び「灘」の2つの購買組合が相次いで誕生し、生活協同組合コープこうべの礎が築られました。そして、この「愛と協同」の理念を実践するために、生活必需品を中心とした供給活動を行うなど、暮らしに直結した幅広い活動を行ってきました。この理念の実践活動の一環として、戦前において、協同組合の婦人会として家庭会が結成され、家庭会を通じて福祉活動を行ってきました。さらに、昭和37年から、同じ考えを持つ組合員が手をつないで、目の不自由な子どもたちのためのさわってみる絵本づくり、地域の福祉施設の訪問活動及び人形劇グループによる活動などを行う「ともしびグループ(ボランティアグループ)」が相次いで結成されました。そして、生活協同組合コープこうべがともしびグループの活動に対する支援を行うことにより、生活協同組合コープこうべにおけるボランティアとの関わり合いの基礎が築られました。

そして、平成7年度が”ボランティア元年”といわれるように、阪神・淡路大震災を契機として、ボランティアの輪が更に広がり、ボランティアの役割の重要性が改めて認識されるなど、社会におけるボランティアに対する意識が大きく変わろうとしています。このような機運に呼応し、ボランティア活動を誰もが参加できる市民活動として定着させ、兵庫県をボランティア先進県とするためには、ボランティア活動に対する支援が不可欠であると考えております。

しかし、ボランティア活動に対する支援を行うにあたっては、生活協同組合コープこうべではその組合員という領域に限定されるため、幅広く兵庫県下のボランティア活動を支援できる主体が必要であると考えております。

そこで、このたび、ボランティア活動団体に対する助成、ボランティアに関する研修等を行うことにより、地域福祉の向上を図るためのボランティア活動の振興を図ることを目的として、財団法人コープともしびボランティア振興財団を設立しようとするものです。

平成7年12月10日

資料2 年表

年月	ともしび財団の動き	コープの動き / 国・県・市町村の動き
1995年1月		●阪神・淡路大震災発生
1995年2月～		●コープこうべ「コープボランティア本部」設置以降、各地区「コープボランティアセンター」を開設 ●マイバック(買い物袋持参)運動を拡大
1996年	●コープともしびボランティア振興財団兵庫県の認可を受け設立 ●ボランティア活動助成を開始 ●「ともしび通信」を発行開始 ●中高生対象「生きがい」講座を開始	●コープこうべでともしび財団への集中募金スタート
1997年	●日本財団よりリフト付きワゴン車を寄贈され、移送サービスを開始	
1998年	●県内における「ボランティア研究委員会」発足 ●青年・学生対象「長期休暇ボランティア体験学習」を実施	●特定非営利活動促進法(NPO法)制定 ●兵庫県「県民ボランティア活動の促進に関する条例」施行
1999年	●中期計画とアクションプログラム(99年答申)策定	●宅配情報誌「めーむ」による募金スタート ●兵庫県社協、神戸市社協、コープこうべの「市民福祉社会への協働憲章」調印
2000年	●高齢者疑似体験器具を購入して講座、研修に活用	●介護保険制度スタート
2001年	●県社協等外部団体との連携強化 ●近畿ろうきんと提携し、定期的な口座引き落としによる寄付開始	●ボランティア国際年・第1回兵庫ボランティアスクエアがスタート
2002年	●他団体と連携したボランティアコーディネータ研修を開催 ●傾聴ボランティア講座を開催	●ひょうごボランティアプラザ開設 ●ひょうごボランティア基金(100億円)創設 ●ひょうご市民活動協議会(HYOGON)発足
2003年	●移送サービスを兵庫移送サービスネットワークに移管	●兵庫県「県民の参画と協働の推進に関する条例」施行
2004年	●コープこうべ買い物袋代金からの寄付を活用して環境分野への助成を開始 ●震災10年誌「ともしびをかかげて」を発行 ●「ユニセフ・ともしびチャリティバザー&オークション」開催 ●ボランティアコーディネートを学ぶ人のための調査研究助成を開始	●コープこうべ「コープ福祉・ボランティアセンター」を「コープ活動サポートセンター」へ名称変更
2005年	●中期計画検討委員会の立ち上げ	●介護保険制度の改正
2006年	●コープハローウィークで財団の活動のアピールと集中募金を展開 ●事務所を生活文化センター西館に移転 ●第一次中期計画を策定	●障害者自立支援法施行
2007年	●運営委員会の発足 ●当事者同士の悩みを分かち合う「セルフヘルプグループ」学習会を開催	
2008年	●大学と協働で募金ツール(ポスター、チラシ、ボトルラベル)を制作 ●「コープともしびボランティア募金」ポスター展を開催 ●ホームページ開設	
2009年	●ボランティア相談サロンを開催 ●公開型の調査研究助成報告会を開催	
2010年	●子どもの発達支援サポーター養成講座を開催	
2011年	●市民活動交流会で設立15周年企画を実施	●夕食サポート「まいくる」代金の一部が寄贈されるしくみがスタート
2012年	●公益財団法人への移行 ●第2次中期計画を策定	●「めーむポイント」募金スタート
2013年	●第2次中期計画スタート	●コープこうべ機関紙「きょうどう」で「地域のちから」を連載 ●ラジオ関西「朝ボラ情報!」で毎週、助成グループの活動を紹介
2014年	●地域課題に応じ、脳トレ講座、居場所づくりワークショップを開催	●「コープ活動サポートセンター」から「地区活動本部」へ変更
2015年	●20周年DVD、パンフレットの発刊 ●ボランティアグループをめぐる視察ツアーの実施	

資料3 講座・研修一覧

年月	事業	年月	事業
1996年	●視覚障がい者ボランティア連絡会 ●視覚障がい者のための料理講座 ●生きがい見つけませんか講座 ●楽しみながらボランティア講座 ●視覚障がいボランティア講座 ●ボランティアリーダー研修	2003年	●読み聞かせ講座バージョンアップ ●助成金獲得講座 ●傾聴ボランティア講座 ●リクリエーション指導者講座 ●ボランティアリーダーのためのコーディネーター講座 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●読み聞かせ講座初級 ●環境サポート講座 ●ボランティアコーディネーター研修 ●環境ボランティアフォーラム ●環境ボランティア講座 ●傾聴ボランティアフォローアップ講座 ●高齢者疑似体験
1997年	●シニアボランティア養成キャンプ ●生きがい見つけませんか講座 ●手引き(外出介助)講座 ●紙芝居を演じる講座 ●朗読を知る ●話し相手の仕方 ●垂水・友生養護学校の参観見学会 ●こども国際キャンプ ●ヘルパー3級取得講座 ●ボランティアはじめの一步2日間講座 ●ボランティアコーディネータ研修 ●震災関連ボランティア交流会 ●ふれあい給食グループ交流会	2004年	●傾聴ボランティア講座 ●傾聴ボランティアフォローアップ研修 ●助成金獲得講座 ●ストーリーテリング、読み聞かせ講座フォローアップ ●長期休暇ボランティア体験学習 ●ボランティアリーダーのためのコーディネーター講座 ●環境ボランティアグループ立ち上げ支援講座 ●わくわく科学実験教室 ●高齢者疑似体験
1998年	●バリアフリーハイキング ●日本語ボランティア入門講座 ●長期休暇ボランティア体験 ●生きがい見つけませんか講座 ●布の絵本作り講座 ●養護学校見学会 ●助成グループ交流、研修 ●運転ボランティア交流、研修 ●青少年問題講演会 ●子供ふれあい環境学習会 ●福祉関連ボランティア交流会 ●震災関連ボランティア交流会 ●地球っ子サマーキャンプIN六甲 ●地球っ子仮設訪問 ●青少年活動ボランティア交流会 ●園芸セラピー講座 ●環境ボランティア講座	2005年	●傾聴ボランティア養成講座 ●紙芝居ボランティア講座 ●語りを聴く会 ●ボランティアリーダーのためのコーディネーター講座 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●ボランティアコーディネーター研修 ●拡大写本ボランティア養成講座 ●傾聴ボランティアフォローアップ研修 ●わくわく科学実験教室 ●高齢者疑似体験
1999年	●分野別交流会 ●生きがい見つけませんか講座 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●シニアボランティア養成キャンプ ●文庫活動のための講座 ●環境学習バスツアー ●コミュニティービジネス講演会	2006年	●手品ボランティア養成講座(8回) ●紙芝居ボランティア講座 ●紙芝居フォローアップ講座 ●創作紙芝居ボランティア講座 ●傾聴ボランティア養成講座 ●傾聴ボランティアのための学習会 ●傾聴ボランティアフォローアップ研修 ●拡大写本ボランティア養成講座 ●福祉ボランティア養成講座 ●読み聞かせボランティア講座 ●長期休暇ボランティア体験学習
2000年	●助成金交流会 ●男性ボランティア入門 ●ボランティアコーディネーター養成研修 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●生きがい見つけませんか講座 ●子育て支援ボランティア講座 ●読み聞かせストーリーテリング ●高齢者疑似体験	2007年	●セルフヘルプ学習会 ●セルフヘルプセミナー ●ボランティアコーディネーター基礎講座 ●ボランティアコーディネータースキルアップ講座 ●読み聞かせスキルアップ&交流会 ●環境配慮型緑化ボランティア講座 ●傾聴ボランティア講座 ●傾聴ボランティアフォローアップ講座
2001年	●10代のこころに向き合うボランティア講座 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●生きがいキャンプ ●ストーリーテリング、読み聞かせ講座 ●ボランティアコーディネーター講座 ●高齢者疑似体験	2008年	●ボランティアグループのための運営支援講座 ●セルフヘルプセミナー ●ボランティアコーディネーター基礎講座 ●ボランティアコーディネータースキルアップ講座 ●傾聴フォローアップ研修 ●傾聴スキルアップ講座 ●コープのボランティア入門講座 ●緑化ボランティア交流会
2002年	●助成金獲得講座 ●ボランティアはじめの一步 ●環境活動サポーター講座 ●長期休暇ボランティア体験学習 ●鎮守の森のボランティア講座 ●男性ボランティア入門 ●読み聞かせストーリーテリング ●ボランティアコーディネータースキルアップ研修 ●傾聴ボランティア講座 ●高齢者疑似体験	2009年	●ボランティアカステップアップ講座 ●手作りおもちゃ交流会 ●傾聴フォローアップ研修 ●ボランティアコーディネーター基礎講座 ●頭すっきり心ほっこりボランティア講座 ●ボランティア相談サロン ●バリエーション講座、セルフヘルプセミナー ●傾聴ボランティア講座 ●朗読ボランティア講座 ●北村多恵トーク&コンサート ●精神保健ボランティア講座 ●エイズ・ピアエデュケーション プレセミナー

年月	事業
2010年	●災害時要援護者支援講座 ●チャレンジ寸劇ボランティア講座 ●子どもの発達支援サポーター養成講座 ●バリエーション講座 ●お買い物ボランティア養成講座 ●活動者のためのあしあと作成セミナー ●うらしま高齢者疑似体験講座 ●ボランティア相談サロン ●セルフヘルプセミナー ●ボランティアコーディネーター基礎講座 ●ボランティアコーディネータースキルアップ講座
2011年	●学んでわかって寄り添って ～ボランティア活動における発達障がいの理解と支援～ ●バリエーション講座(基礎・演習) ●語り合いませんか、介護のこと ●傾聴ボランティア養成講座 ●傾聴ボランティアフォローアップ講座 ●長期継続ボランティアのためのリフレッシュ講座
2012年	●バリエーション基礎講座 ●バリエーション講座(演習) ●傾聴ボランティアフォローアップ講座 ●傾聴ボランティア養成講座 ●セルフヘルプセミナー ●子育て[ひろば]エンパワメント講座 ●親子で学ぼう防災講座
2013年	●傾聴ボランティアフォローアップ講座 ●傾聴ボランティア講座 2回コース ●バリエーション基礎編 ●傾聴講座 ●読み聞かせ・紙芝居ボランティア交流会 ●ブログ作成講座 ●活動の継承講座(宝塚) ●気づいてください!親子のSOS!! ●活動の継承講座(西宮)
2014年	●傾聴フォローアップ講座 ～聴く力を育てよう～ ●傾聴ボランティア講座 ●傾聴フォローアップ講座 ●これからの介護講座 ～介護を一人で抱え込まないために～ ●セルフヘルプグループ図書館 ●絵本講座 ～大人も楽しむ絵本の世界～ ●思いを受け止め、共感を広げるボランティア交流会 ●居場所づくりワークショップ ●頭と身体を同時に使って認知症予防体験セミナー



これからの介護講座



セルフヘルプセミナー



居場所づくりワークショップ



傾聴ボランティア講座



認知症予防体験セミナー

資料4 分野別ボランティア活動助成金額・助成グループ数の推移

	1996年		1997年		1998年		1999年		2000年		2001年	
	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数
病院・施設訪問	1,521,502	60	1,528,440	46	962,361	38	1,261,883	47	1,010,121	44	1,019,860	43
福祉サークル	978,450	52	1,303,634	57	1,279,337	73	1,024,523	50	707,486	45	975,640	55
復興支援	2,537,623	50	2,897,200	41	2,222,077	45	746,469	18	418,000	13	185,000	4
障がい者支援	1,117,095	37	1,125,145	30	1,369,215	21	1,009,000	15	1,782,400	33	1,829,000	33
食事サービス	2,953,411	24	2,655,157	30	3,064,554	45	2,806,476	42	2,782,014	44	2,558,592	43
資格・技能活動	1,181,300	15	1,208,126	14	1,742,716	37	1,144,000	35	743,214	23	867,003	27
その他(国際交流・青少年活動)	975,450	36	1,109,526	26	1,340,906	24	1,532,840	32	1,746,300	39	1,125,855	27
ふれあいサロン(喫茶)											592,500	19
環境の保全												
計	11,264,831	274	11,827,228	244	11,981,166	283	9,525,191	239	9,189,535	241	9,153,450	251

	2002年		2003年		2004年		2005年		2006年		2007年	
	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数
病院・施設訪問	770,800	42	716,100	39	669,740	30	647,730	27	546,310	26	468,000	24
福祉サークル	751,940	60	751,864	60	702,880	42	643,030	35	538,870	31	518,000	32
復興支援	162,000	3	148,000	3	185,600	3	185,240	2	205,240	2	192,000	2
障がい者支援	1,602,588	33	1,790,550	32	1,563,695	23	1,576,565	23	2,160,700	28	2,156,000	25
食事サービス	2,287,121	44	1,471,055	43	1,276,820	37	960,030	33	923,030	27	840,000	25
資格・技能活動	1,299,600	36	1,483,705	40	2,420,060	48	2,613,587	50	2,700,800	54	2,513,000	54
その他(国際交流・青少年活動)	1,566,074	40	977,487	23	1,196,637	22	1,854,359	29	2,507,426	39	2,787,000	41
ふれあいサロン(喫茶)	737,503	28	575,800	29	384,760	16	406,980	16	603,880	21	589,000	22
環境の保全			776,000	15	2,348,130	45	2,179,959	44	2,246,495	44	2,054,000	43
	9,177,626	286	8,690,561	284	10,748,322	266	11,067,480	259	12,432,751	272	12,117,000	268

		2008年		2009年		2010年		2011年		2012年		2013年		2014年		2015年	
		助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数	助成金額(円)	グループ数
福祉	高齢者	1,553,000	49	1,244,000	39	1,267,000	35	1,283,000	33	1,203,000	32	975,000	28	1,030,000	32	1,361,000	43
	障がい者	1,842,000	27	1,735,000	26	1,563,000	23	1,433,000	21	1,237,000	19	1,231,000	18	1,167,000	18	1,413,000	20
	地域住民	99,000	3	165,000	5	59,000	3	126,000	3	129,000	1	264,000	5	221,000	6	320,000	7
	在日外国人	0	0	0	0	0	0	172,000	1	170,000	1	136,000	1	136,000	1	120,000	1
	特定団体	219,000	12	209,000	11	126,000	7	127,000	8	87,000	5	48,000	2	40,000	2	18,000	1
	不特定団体	0	0	0	0	0	0	0	0	66,000	1	50,000	1	0	0	0	0
	施設・病院	484,000	21	393,000	19	300,000	16	235,000	12	267,000	12	225,000	11	214,000	9	225,000	5
	小計	4,197,000	112	3,746,000	100	3,315,000	84	3,376,000	78	3,159,000	71	2,929,000	66	2,808,000	68	3,457,000	77
社会教育		32,000	1	30,000	1	30,000	1	0	0	0	0	0	0	88,000	1	0	0
まちづくり		334,000	14	356,000	14	410,000	14	378,000	11	445,000	13	449,000	12	959,000	11	610,000	9
文化・芸術		1,171,000	22	1,012,000	19	576,000	12	760,000	11	729,000	10	608,000	10	856,000	11	502,000	9
地域安全		26,000	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
人権・平和		147,000	2	10,000	1	12,000	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国際協力		564,000	7	324,000	4	394,000	5	444,000	5	427,000	5	349,000	5	245,000	4	288,000	6
男女共同参画		130,000	1	221,000	1	416,000	2	436,000	2	430,000	2	572,000	4	734,000	3	226,000	1
子ども育成		1,911,000	35	1,731,000	36	1,746,000	35	1,790,000	32	2,128,000	33	2,492,000	40	2,910,000	43	2,732,000	42
環境の保全		1,847,000	43	1,655,000	37	1,254,000	32	1,462,000	29	1,398,000	25	1,571,000	29	1,298,000	26	1,394,000	28
計		10,359,000	238	9,085,000	213	8,153,000	186	8,646,000	168	8,716,000	159	8,970,000	166	9,898,000	167	9,209,000	172



「Anniversary 20周年記念誌」

発行日／2016年2月16日
編集／(公財)コープともしびボランティア振興財団事務局
 (吉村恵理子、地藤晴美、山田しげ子、大西美江、中西頼子)
発行／〒658-0081 神戸市東灘区田中町5丁目3-20 生活文化センター西館2階
 (公財)コープともしびボランティア振興財団 理事長 山口一史
 TEL.078-412-3930
 FAX.078-412-3871
印刷／株式会社 北星社